

芸術実践領域（実技系）

# 学位論文作成マニュアル

東京藝術大学大学院音楽研究科



芸術実践領域（実技系）

# 学位論文作成マニュアル

東京藝術大学大学院音楽研究科



# イントロダクション

「論文を書くのは難しい」と言われるのを時折耳にします。たしかに、論文を書くことは容易いことではありません。でも、ちょっとしたコツを知っていれば、無駄な時間を費やさなくて済むようになります。論文を書くための負担感を少しでも軽減しようと作られたのが、このマニュアルです。

本マニュアルは、主に大学院音楽研究科の**音楽専攻（作曲、声楽、鍵盤楽器、弦・管・打楽器、室内楽、古楽、指揮、邦楽）の博士論文**を作成することを念頭に書かれていますが、音楽専攻の修士論文や音楽文化学専攻の修士・博士論文を作成する際にも参考になる記述がいくつもあると思います。適宜、ニーズに合わせて活用してください。

全体は、次のように7つの章と付録で構成されています。

1. 学位論文 FAQ
  2. 研究テーマとアプローチの決め方
  3. 資料の活用法
  4. 論文の構成
  5. Word の使い方
  6. 参考文献のまとめ方
  7. 博士論文作成計画の立て方
- 【付録1】博士リサイタルと学位審査演奏会の実施方法  
【付録2】博士学位授与プロセスのガイドライン

最初から順番に読んでも、興味のあるところを拾い読みしてもいいようにできています。また、作業中の確認にも使えるよう、目次の見出しを細かくしています。

東京藝術大学では、平成 20～24 年度に芸術リサーチセンターを設置し、博士学位授与プロセスに関する研究を実施しました。このマニュアルは、その成果として作成された「芸術実践領域（実技系）博士プログラム」の補遺という位置づけです。本マニュアル活用の際には、「芸術実践領域（実技系）博士プログラム」や芸術リサーチセンターの成果報告書も合わせて参照してください。これらは冊子、及び本学ウェブ上で公開されています。

尚、本マニュアルは、今後定期的にアップデートされる予定です。誤記はもとより、内容に関する意見や要望などありましたら、気軽に教務係までお知らせください。

## 目次

<b>イントロダクション</b>	<b>1</b>
<b>1. 学位論文 FAQ</b>	<b>5</b>
1. 「修士論文」と「博士論文」の違いは？	5
2. 「研究」って、何ですか？	5
3. 「実践に基づく研究」って、どういうものですか？	6
4. 「問い」は、どうやって立てるのですか？	6
5. いつ「問い」を立てたらいいのですか？	7
6. どんな研究アプローチがあるのですか？	8
7. 学位論文は分厚くないといけないのですか？	9
8. 音声・映像メディアを用いてもいいのですか？	9
9. 博士論文は誰に向けて書くのですか？	9
10. 博士論文って何のために書くのですか？	9
<b>2. 研究テーマとアプローチの決め方</b>	<b>10</b>
1. 研究テーマのしぼり方	11
2. アプローチのタイプ	12
<b>3. 資料の活用法</b>	<b>14</b>
1. 研究資料を見分ける	14
2. 一次資料と二次資料	15
3. 学術的な信頼性	16
4. 必要とする研究資料にどうたどり着くか	17
1) 音楽事典を活用する	17
2) データベースを活用する	17
3) 文献は芋づる式に見つかる。だが……	18
5. 資料に関する情報を整理する	18
<b>4. 論文の構成</b>	<b>19</b>
1. 論文の形式	19
1) 要旨	19
2) 扉	19
3) 論文冒頭部分	19

4) 論文本体	20
5) 論文巻末部分	20
2. 文章の構成	21
1) 論文全体の結論は？	21
2) 章立ての決め方	21
3) 各段落の構成	22
4) 論理的な文章を書くための注意	22
<b>5. Word の使い方</b>	<b>23</b>
1. 基本編 (レイアウト設定)	23
1) 余白の設定	23
2) フォント・文字サイズの設定	24
3) 行間・両端揃え	25
4) 引用：インデント（字下げ）の設定	26
5) 歌詞対訳の掲載	26
6) 譜例などの図の挿入	27
7) ページ数字の挿入	29
8) 改ページの挿入	29
9) 脚注を入れる	29
10) 書誌	29
2. 応用編 (便利なツール)	30
1) スタイル機能	30
2) 目次の作成	31
3) 図番号・譜例番号、各リストの作成	32
<b>6. 参考文献のまとめ方</b>	<b>34</b>
1. 資料を分類する	34
2. 資料を順序よく並べる	34
3. 資料の情報を的確に記述する	35
1) 文字情報（和書）	35
2) 文字情報（洋書）	36
3) 楽譜情報	36
4) 視聴覚情報	36
5) オンライン情報	36
4. 参考図書	37

<b>7. 博士論文作成計画の立て方</b>	<b>38</b>
1. 計画を立てるまえに	38
2. 論文提出までの流れ	38
3. 論文作成計画の例	39
4. 上手な計画の立て方	42
5. なぜ時間がかかるのか	42
<b>【付録1】博士リサイタルと学位審査演奏会の実施方法</b>	<b>45</b>
1. 博士リサイタル	45
1) 演奏・舞踊専攻	45
2) 作曲専攻	45
2. 学位審査演奏会・学位審査作品	45
1) 学位審査演奏会	45
2) 研究成果の公開	46
<b>【付録2】博士学位授与プロセスのガイドライン</b>	<b>50</b>
1. 研究の定義	50
2. 博士研究記録ファイル	50
3. 指導教員会議	50
4. 博士リサイタル	51
5. 年次手続き	51
5.1. 1年次	51
5.2. 2年次（～修了前年次）	52
5.3. 3年次（もしくは修了予定年次）	52
6. 最終審査	53
6.1. 学位審査委員会	53
6.2. 審査の対象	53
6.3. 学位論文	53
6.4. 学位審査演奏会・学位審査作品	53
6.5. 最終試験（口述試問）	53
7. 研究成果の公開	54



# 1. 学位論文 FAQ

まずは芸術実践領域（実技系）の学位論文がどのようなものか、FAQ（よくある質問）形式で理解しましょう。

## 1. 「修士論文」と「博士論文」の違いは？

修士論文も博士論文も、学位論文（正確には「学位請求論文」）と呼ばれるもので、修士号や博士号という学位を取得するために提出し、審査を受ける論文のことです。どちらも、それぞれの課程における研究成果を「論文」という形にまとめるものなので、内容に関する大きな違いはありません。

しかし、修士論文と博士論文では、次の点において違いがあると一般に考えられています。

規模 …… 博士研究の方が、修士研究よりも時間をかけて、より本格的におこなわれるため、論文の構成や長さも、より大規模なものになる。

深さ …… 博士研究の方が、より専門的な内容を深く探究することが求められ、論文の記述もより精緻なものが要求される。

オリジナリティ …… 博士論文では、独自の研究成果が重視されるが、修士論文では、先人の研究成果をまとめたり、批判的に分析したりする比重が大きくてもよい。

また、**提出方法や審査の手続きに、さまざまな違いがあります。**博士論文の方が、修士論文に比べてはるかに煩雑で、文部科学省の省令でも細かく規定されています。修士論文のように、論文を提出して終わりというわけにはいかないのです、よく注意してください。一方、修士論文の規定は、専攻ごとに異なっているので、各自で確認するようにしてください。

## 2. 「研究」って、何ですか？

「勉強」や「調査」との違いから考えてみましょう。

勉強 …… 既にあるもの（体系化されたもの）を学ぶこと、習得すること

調査 …… 何かを明らかにするために、必要なデータ（資料となるもの）を集めること

## 1. 学位論文 FAQ

研究 …… 未だ明らかにされていないことについて問いを立て、その答えを明らかにすること

つまり、「研究」では、答えを出すことと同時に（しばしば「答え」そのものよりも）、「**問い**」をうまく立てることが大切です。研究の目的は、何かを「証明」することではありません。まだよく理解されていない、けれど解決する必要がある問題を見つけだし、それを他人に知らせることができる形で明らかにする、ということが重要です。

とくに芸術実践領域（実技系）の場合は、作曲や演奏等を実践する過程で遭遇したことに対して「問い」を立て、それに対する「答え」を、実践での試行錯誤も含めて追究することが「研究」となります。それなので、知的な興味とともに、技術や表現力などを高めるために、自分にとってもっとも重要な「問い」は何かを考えることが大切です。

## 3. 「実践に基づく研究」って、どういうものですか？

しばしば「演奏家（作曲家）らしい論文を書きなさい」と言うのを耳にします。でも、それは音楽的営みをそのまま言葉に置き換えることを意味するではありません。作曲や演奏の内容を文学的な言葉で表現するのではなく、音楽作りのプロセスの一部を探究することが研究です。

近年、国際的に広まっている「実践に基づく研究」（practice-based research）というのは、自分のこれまでの芸術的实践を客観的に振り返り、そのエッセンスの一部を分析的に説明することや、芸術の実践過程で遭遇した問題に向き合い、それを解決するプロセスを記録にとどめることを指します。つまり、芸術実践を通じて、あるいはきっかけとして得た知見を他者と共有可能なものにする営みです。「音楽の研究」というよりも、「音楽作りのプロセスに関する研究」と考えた方がよいかもしれません。

## 4. 「問い」は、どうやって立てるのですか？

時折、学問研究には、「純学問」と「実践研究」の二つのタイプがあると言われます。

純学問 …… すでに体系化された学問分野において、新たな知見を加えること。まずはその学問体系をマスターし、未踏の部分を見つけて、その部分を調査研究する。（例：歴史資料研究、哲学、理論物理学など）

実践研究 …… 実際に何かをしている中で問題に感じた「**解決すべき課題**」を設定し、それに対する答えを追究すること。（例：防災学、臨床哲学、工学）

伝統的な音楽学の研究は、前者の「純学問」ということができます。一方、芸術実践領域（実技系）の研究は、主に後者の「実践研究」に属します。

ただし、ここで「純学問」と「実践研究」と呼んでいるものは理念型で、ほとんどの研究はこれらの中間に位置します。音楽学の研究でも（とくに最近のものは）実践的側面をもっているものは多くありますし、芸術実践領域（実技系）の「実践研究」でも先行研究の内容を押さえるのは必須です。また、「問い」を探究する方法（アプローチの仕方）についても明らかにし、「答え」へと導くプロセスを明示する必要があります。

## 5. いつ「問い」を立てたらいいのですか？

芸術実践の中で遭遇した問題に対して、「問い」を設定して取り組み始めてみたものの、適切な「答え」が見つけれそうにない、ということはよくあります。たとえば、次のようなケースが考えられます。

- ・「問い」が大きすぎて、期限内に解決不能なことがわかった。
- ・作業の途中で、すでに誰かが答えを出していることが判明した。
- ・作業の途中で、当初立てた「問い」よりも興味をもつことができて、それにつられて作業が逸れていった。

このような場合は、研究の途中でも、自分の出した「答え」（もしくは、出せそうな「答え」）に合わせて、「問い」を立て直す必要があります。最初の「問い」に固執して、「答え」が見いだせなくなるよりも、**次善の「問い」**を設定し、それに見合った「答え」を見つけることの方が大切です。

前にも触れたように「研究」は「勉強」と違い、あらかじめ「答え」がわかっていません。ですから、**一貫性のある「問い」と「答え」の関係を見つけ出すことこそが**、研究の意義と言えるかもしれません。

実際、研究を開始する際の素朴な「問い」と、論文を執筆する際に読者に伝える「問い」は、むしろ別なものと考えた方がよいでしょう。

研究開始時の自らの「問い」……「解決すべき課題」として、研究に着手する際に立てる素朴な疑問

論文中での読者に伝える「問い」……論文を執筆する際に、最初に述べる研究設問

論文では、「問い」と「答え」が一貫していることが求められます。そうでないと人は納得しないからです。論文の最初に書かれる「問い」（問題提起）は、「答え」から導き出された**後付けの「問い」**であっても問題はありませぬ。

## 6. どんな研究アプローチがあるのですか？

研究には、さまざまなアプローチの仕方があります。博士論文の場合は、通常、以下の複数組み合わせられて用いられます。どんな論文でも①は先行研究レビューとして必須です。芸術実践領域の研究では、とくに②や③が重要になります。⑤や⑥も②と組み合わせられて用いられることがあります。

①文献研究 … 先行研究を吟味し、新しい視点や解釈を見つける。論文の最初に置かれる先行研究レビューは、これの一種。芸術実践領域の研究では、先行事例の検証ということも考えられる。

②アクションリサーチ（当事者研究） … 次の参与観察に似ているが、実際に自分が何かアクションをおこすことで、それがどのような作用を及ぼすかを記録し、省察する（振り返る）。芸術実践領域の研究では、自分の芸術実践の過程を記録・省察する、あるいは、誰かとともに何かを試み（教育的な実践など）、それについて記録・省察する、というようなことが考えられる。

③参与観察研究 … ある現場に出かけ、その集団に加わり、そこで行われていることを観察記録し、分析をおこなう。集団による作品制作に加わり、制作の過程を参与観察する、あるいは、アンサンブルに加わり、リハーサルを参与観察するなど。

④事例研究（ケーススタディ） … 一つ（複数）の事例を選び、その事例を調査する。従来になくユニークな教育やイベント、あるいはコンサートの一部始終を観察者として観察し、効果や問題点などを指摘する。

⑤歴史的・分析的研究 … 資料やデータを収集分析し、未知の実態を明らかにする。過去の作品の成立や受容の背景を明らかにする。作品の分析から特質を抽出する。過去の作品や演奏について録音・録画に基づき詳細に分析する。

⑥仮説検証研究 … 最初に仮説を設定し、それが正しいか調査・実験する。ある材料や構造が作品に用いられていることを、調査分析を通じて立証する。ある表現を達成するために、どのような技法を用いるとよいか検証実験をする。

どのアプローチを用いるかは、研究のテーマや目的によって決まります。ただし、いずれの場合でも、どのような方法を用いて研究をおこなうかは、論文の中で明確に記述する必要があります（方法論の明確化）。

## 7. 学位論文は分厚くないといけないのですか？

修士論文も博士論文も、重要なのは長さではありません。いくら量が多くても、すでにどこかに書かれていることばかりでは意味がありません。とくに実践研究の場合は、**分量は問題ではありません**。いかに適切な問いを立て、それに答えを導き出すことができるかが勝負です。量より質を目指してください。

## 8. 音声・映像メディアを用いてもいいですか？

本文の内容を補足するものとして、DVDなどのメディアを添付することは可能です。ただし、助演者がいる場合には許可をとり、著作権の所在を明確にすることが必要です。楽譜などのコピーも必要に応じて添付することはできますが、研究成果公開の際には、著作権の問題が発生することがあるので留意してください。

## 9. 博士論文は誰に向けて書くのですか？

博士論文は、難しいことを難しく書くものではありません。まだ知られていないことを明らかにし、それを**わかりやすく書く**ことが重要です。完成後に論文を読むのは、そのテーマに精通している専門家ばかりではないことを意識し、丁寧に説明することを心がけてください。完成した論文は、国会図書館と大学の附属図書館に収められます。また、今後はウェブサイトでも公開されるようになります。

## 10. 博士論文って何のために書くのですか？

博士論文は、当該領域の芸術実践における新しい知見を他人と共有可能にし、芸術創造のさらなる進化や深化を遂げるための土壌作りをすることに貢献するものです。新たな「知」を生み出すことで人間の生をより豊かにし、社会に貢献するものといっても過言ではありません。

しかし、博士論文は、**自伝的意味**を持つものでもあります。これまで培ってきた芸術実践をある切り口からまとめあげることで、過去の自分自身の表現創造活動を見つめなおし、次のステップへと進む足がかりになるものと考えて、取り組むとよいでしょう。

### 参考文献

- 小田博志『エスノグラフィー入門』東京：春秋社、2010年。
- 佐藤郁哉『フィールドワークの技法』東京：新曜社、2002年。
- 妹尾堅一郎『研究計画書の考え方』東京：ダイヤモンド社、1999年。

## 2. 研究テーマとアプローチの決め方

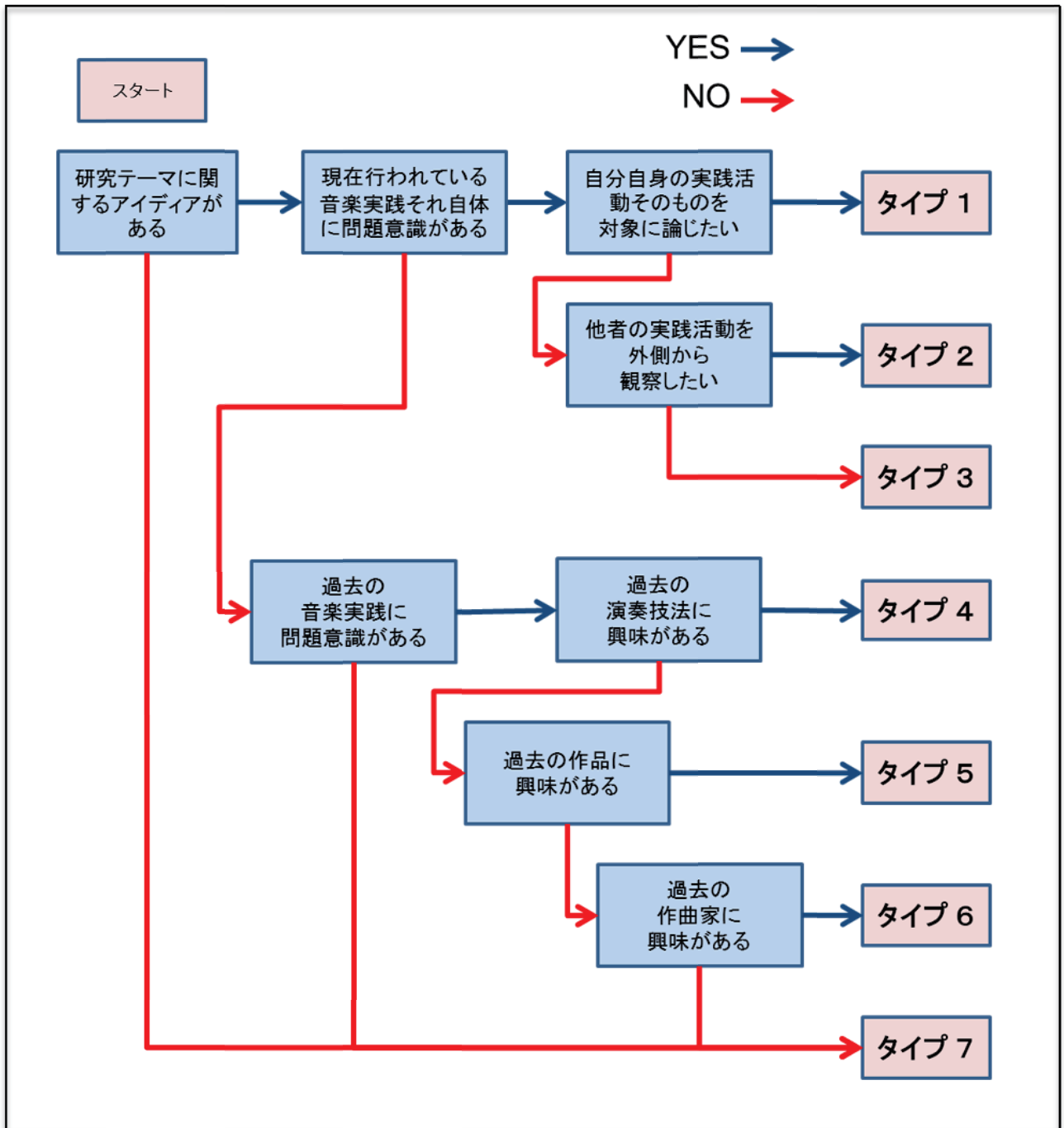
研究内容が漠然としたアイディアに留まっていて、研究テーマやアプローチが未だ決まっていないとき、どのようにして研究の形を作っていくのがよいでしょうか。

研究テーマやアプローチは、自分から離れたところに突如として現れる（思いつく）ものではなく、自分自身の周辺にある事柄のなかから生まれるものです。そのため、研究テーマやアプローチの構想を練るときには、自分自身がこれまで関心を抱いてきた事象や印象的な音楽体験などを紐解いていくことが肝要です。この段階で、まずは自分の中にあるイメージにしたがって、論文の仮題目を設定することをお勧めします。そして、関連の事例について調べたり、周辺事項を調べたり、文献リストをつくって過去の研究（先行研究）を精査したりすると、自分の研究したい内容の輪郭が次第に捉えられるようになるでしょう。研究内容の輪郭が見えてきたら、研究テーマと研究対象を策定し、そのアプローチを決めていくことになります。

ここでは、フローチャートを用いて、研究テーマやアプローチをしぼる道筋を具体的にイメージしましょう。

1. 研究テーマのしぼり方

研究テーマをしぼる道筋は、自分の抱く問題意識について自問自答する過程でもあります。フローチャートの質問に答えて進んでください。あなたはどのような道を進んででしょうか。ではスタート！



## 2. アプローチのタイプ

研究テーマをしぼっていくことで、自分のアプローチのタイプが見えてくると同時に、研究内容についてもずいぶん明確になったと思います。

このフローチャートでは、アプローチのタイプを仮に7通りに分類しました。各タイプの詳細は下記の通りです。とくに研究内容の例を参考にして、自分自身のアプローチをさらに検討してみましよう。

なお、ここに挙げたタイプには収まらず、たとえば複数のタイプにまたがる研究内容や、ここにはない新しいタイプの研究内容などもあることをお断りしておきます。

タイプ	型	研究内容の例
タイプ1	アクション リサーチ (当事者研究)	現在の音楽実践のなかでも、自らの行っている実践活動そのものについて論じたいあなたは、自分の音楽実践の過程を記録・省察するとよいでしょう。 例えば、演奏時における身体の使い方を分析する研究や、発声法を分析する研究などがあります。
タイプ2	事例研究	現在の音楽実践のなかでも、他者の活動を完全なる観察者として論じたいあなたは、ある音楽実践の場を訪れ、そこで行われていることを傍観的立場から観察・記録・分析するとよいでしょう。 例えば、コンサートやレッスンなどを観察し、効果や問題点を論じる研究があります。
タイプ3	参与観察研究	現在の音楽実践のなかでも、他者の活動を直接的に把握したいあなたは、他者の活動に参加し、現場でおこっていることを彼らの視点から記録・分析するとよいでしょう。 例えば、アンサンブルに加わって、リハーサルの様子を参与観察・記録・分析する研究があります。
タイプ4	歴史的研究・ 演奏研究	過去の音楽実践のなかでも、とりわけ演奏技法に興味のあるあなたは、過去の演奏に関する未知の実態を楽譜史料や録音・録画資料などを分析して明らかにするとよいでしょう。



タイプ5	歴史的・研究・ 楽曲研究	過去の音楽実践のなかでも、とりわけ過去に成立した作品に興味のあるあなたは、歴史史料を収集・解読したり、作品を分析したりして、当該の作品に関する未知の実態を紐解くとよいでしょう。 例えば、作品の成立過程や受容の背景を明らかにする研究や、作品の解釈や音楽的特質について論じる研究などがあります。
タイプ6	歴史的・研究・ 作曲家研究	過去の音楽実践のなかでも、とりわけ過去の作曲家に興味のあるあなたは、歴史史料を収集・解読して作曲家に関する未知の実態を解明するとよいでしょう。 例えば、作曲家の生い立ちや活動実態を明らかにする研究などがあります。
タイプ7	研究テーマに関する アイデアがない…	研究テーマに関するアイデアのないあなたには、下記をすることを勧めします。  <ul style="list-style-type: none"> <li>👉 これまでの音楽経験で強く印象に残っていることや、疑問に感じたことを思い出してみよう。</li> <li>👉 自分が現在の演奏スタイルを確立した経緯を振り返ってみよう。</li> <li>👉 自分のなかで特定の作品に対する音楽観が芽生えた過程を思い起こしてみよう。</li> <li>👉 自分の教育体験を振り返ってみよう。</li> <li>👉 頭のなかで考えていることを具体的なメモにおこしたり、人に聞いてもらったりしよう。</li> <li>👉 キーワードと思われる言葉を書き出してみよう。</li> </ul>

## 3. 資料の活用法

論文を執筆する際には、研究テーマに関して、これまでどのような研究が行われてきたのか(研究状況)を把握し、そうした過去の研究(先行研究)をふまえ、また先行研究を必要に応じて参照しなければなりません。自分がいかに独創的なテーマだと考えていたとしても、すでに同じようなテーマで研究をしている者がいるかもしれませんし、また、自らの研究の正当性や独自性を、説得力をもって示すためにも、過去の研究の蓄積をふまえ、それに批判的な検討を行っておくことは、論文を執筆する上で欠くことの出来ない、最初の、そして最も重要なステップなのです。そこで、以下では、研究資料にアクセスして、それを活用するための基本的な方法についてまとめておきたいと思います。

### 1. 研究資料を見分ける

まず、音楽研究が他の研究領域と比べて特殊な点は、研究資料が多岐にわたることです。「文献」と呼ばれる研究書や学術論文などに加えて、楽譜、録音資料、映像資料も、音楽研究においては重要な研究資料となります。また、近年は、出版されたものだけでなく、インターネット上にもさまざまな資料が存在します。ここでは、とくに論文執筆の際に最も重要な研究資料となる「文献」について整理しておきたいと思います。

音楽研究で用いられる文献には、大別すると以下のようなものがあります

表

参考図書	事典(総合事典、主題別事典)、目録(作品目録・文献目録)
単行本	研究書、概説書、解説書、啓蒙書
論文	学術論文(学会誌、紀要、論文集)、学位論文
その他	雑誌・新聞記事、CD解説、曲目解説

論文を執筆するためには、**文献をそれぞれの性格にあわせて活用していくことが必要**となります。研究を展開するには、研究対象に関する基礎的な知識を欠くことはできませんし、一方で、最新の学説を知っておくことも重要です。例えば、事典類からは、研究対象に関する基礎的な知識を包括的かつ体系的に得ることができます。しかし、そこから研究対象に対する最新の研究内容を知ることはできません。なぜなら、**事典は対象に関する一般的な共通認識を論述するもの**だからです。ただし、そうした事典類を活用する際にも、できるかぎり最新のものを参照すべき

です。かつて事典に載せられ、一般に信じられてきた学説が最新の研究によって覆されたり、修正されたりすることがあるからです。

**学術論文は、著者自身による特殊かつ最新の学説が展開されるものです。**しかし、最新の内容であるがゆえに、その評価がまだ定まっていない可能性もあります。また、論文の内容については、既存の学説をふまえた上で、それに新たな知見を加えたり、それを反証したりするものなので、学術論文をきちんと読みこなすには、研究分野に関する一般的な知識が欠かせません。**研究書は、著者がさまざまな媒体に発表した長年の研究成果を書物にまとめたものが多いでしょう。**したがって、記述されている内容も、学術論文に比べれば、ある程度、評価が定まったものと考えてもいいですが、これもまた、事典とは違って、研究対象に関する一般的な共通認識というよりも、著者の独自の見解であることに注意すべきでしょう。

こうしたさまざまな文献を通して、研究対象に関する先行研究を整理し、その中身を批判的に検討していく作業を、**文献研究**と言います。先にも述べたように、自らの研究を進めていくにあたって、これまでの研究状況を把握し、自らの研究がその中でどのような位置づけにあるのかを明確にすることは、欠くことのできないステップです。その際、研究対象となる分野にすでに精通しているならば、いきなり研究書や学術論文に取り組むのもいいでしょう。しかし、自分がよく知っているつもりでも、基本的な知識が抜け落ちているということもありがちです。したがって、代表的な参考図書には必ず目を通し、研究対象に関する「常識」を押さえた上で、より専門性、特殊性の高い内容に進んでいくのが、文献研究を進める手順としては順当であると言えます。

## 2. 一次資料と二次資料

学術研究の基本は、ひとつの事柄に対し、**できるかぎりオリジナルの情報を参照するという態度**です。この考え方に即し、研究資料は、一般的に一次資料／二次資料のふたつの種類に分けることができます。

**一次資料とは、第三者による加工や編集を経していない「オリジナル」な研究資料のことを指します。**例えば、楽譜であれば、自筆譜や筆写譜、写本や初版譜のような原典資料、またそれらのファクシミリ版（現物を複写印刷したもの）がそれに該当します。また、音楽それ自体ではなく、作曲家やその周辺の人々の言説を研究する場合には、対象となる時代・地域の新聞や雑誌、また書簡や日記のような、作者本人の言説にさかのぼるような資料も、一次的な資料として取り扱うことができます。さらに、フィールドワークを行ったり、自らの、あるいは他者の演奏を研究対象としたりする場合には、録音・録画、測定データ、現場において自らが記録したノートやメモ類も重要な一次資料となります。また、社会学的な関心に基づく研究では、統計資料のようなものも一次資料として用いることができるでしょう。

対して、**二次資料とは、オリジナルの資料などから得られた研究内容を含む文献全般のこと**を指します。一般的には、研究書や学術論文などがこれに該当します。また、そうした文献に加えて、オリジナルの資料の基づくものの、第三者による加工や編集が加えられたものも、二次資

### 3. 資料の活用法

料となるので注意が必要です。例えば、楽譜でも批判校訂版（いわゆる「原典版」と呼ばれているもの）は、校訂者によるオリジナル資料の研究にもとづいて作成された楽譜なので、二次資料となります。

研究はできるかぎり一次資料にもとづいて行うのが基本です。しかし、全ての研究が一次資料に基づいて行われるべきであるというわけではありません。例えば、作品研究を行う場合、研究の主眼が楽曲分析や作品解釈にあるときには、自筆譜にまでさかのぼって研究を行う必要は特にありません。こうした場合は、信頼のおける批判校訂版を用いるので十分な場合がほとんどです。また、対象となる資料が遠隔地にあったり、貴重なために公開されていないなどの理由で実物を見ることができない場合もあるでしょう（ただし、近年は、国内外の図書館や博物館のウェブサイトで、一次資料の画像データの公開が進んでいるので、そうしたものを活用することもできます）。一次資料を参照することが物理的に困難な場合は、信頼のおける二次的な文献に頼ることも可能です。ただし、どちらの場合も、参照する資料が一次資料の取り扱いに関して、しっかりと**典拠を明示している**かどうかを必ず確認することが重要です。書かれてある内容に対して典拠が明示されていない場合は、その内容をそのまま鵜呑みにすることは避け、必ず別の文献の記述と比較して、その内容を精査すべきです。

### 3. 学術的な信頼性

先ほど二次資料の活用に関して、信頼性の問題に言及しました。文献を活用する上で、重要となるのが、果たしてそれが**学術的に信頼のおけるもの**であるかどうかという問題です。例えば、14頁の表に挙げた文献のうち、論文執筆において参照するものとしてふさわしいのは、基本的に■の範疇に入るものでしょう。それ以外は、学術的なものとは言いがたく、したがって研究において参照するにはふさわしいものではありません。学術的であるというのは、**客観的かつ専門的に記述された内容をもつ**ということです。したがって、エッセイのような主観的なものや、また解説や啓蒙を目的とした簡易なもの、また新聞や一般の音楽雑誌、CDや演奏会の解説といった一過的な性格の強いものは、研究において参照する文献としては基本的に用いるべきではありません。

上記の中で難しいのは、単行本の内容をどう判断するかでしょう。単行本を判断する時のひとつの目安となるのは、きちんと注がつけられているか、また参考文献表が備わっているか、という点です。学術的な信頼性は、書かれた内容に対して、注や参考文献のかたちでしっかりと**典拠が明示される**ことによって担保されています。こうした情報がない文献は、書かれてある内容が信頼のおけるものか、またきちんと先行研究に則ったものであるかどうかを客観的に判断することができないため、そのまま参照するのは好ましくありません。どうしても参照したい場合には、別の文献と比較して裏付けをとるなど、十分な注意が必要です。

学術論文は、それが掲載されている媒体の種別により、学会誌論文、紀要論文、論文集の論文の3種類に分けることができます。この3つは掲載される媒体によって性格を若干異にし

す。学会誌論文は、同じ研究分野の研究者による「査読」(ピア・レビュー)を経て掲載されているため、学術的な信頼性の最も高いものです。一方、紀要論文の場合は、そうした査読を経していないことが多いため、質的に玉石混淆である場合が少なからずあります。論文集に関しては、査読は行われない場合が多いですが、その分野の専門家による委員会やグループによって編纂されていることが多いため、内容的な信頼度は高いと言えます。

#### 4. 必要とする研究資料にどうたどり着くか

文献探索とは、ある種の出会いです。図書館の書棚を散策していて、何気なく、偶然、手にとった書物に、長い間、疑問に思っていた事柄に対する答えやヒントが書かれていたり、その内容が研究全体に決定的な影響を与えたりすることがあるかもしれません。したがって、日常的に大学図書館を利用し、閲覧室や書庫の中にどのような文献が並んでいるかを体感的に把握しておくことは大事です。

そういう意味では、文献探索にある決まったシステムティックな方法論があるわけではありません。しかし、それでも、研究を進めていく上では、できるかぎり合理的に自分の必要とする文献にたどり着くことが必要です。そのためには上に説明したような資料や文献の種別やそれぞれの性格をよく把握しておくと同時に、文献探索の手順についても基本的なやりかたを押さえておくことが便利でしょう。

##### 1) 音楽事典を活用する

これまでの研究史や研究状況を把握し、過去の代表的な先行研究にどのようなものがあるかを知るには、事典の参考文献表を見るのが一番です。西洋音楽の研究においては、*New Grove Dictionary of Music and Musician* (日本語版：『ニューグロヴ世界音楽大事典』)と、ドイツ語の事典 *Die Musik in Geschichte und Gegenwart* (MGG) がこうした参考文献表を備えた総合事典の代表的なものです。研究を始めるにあたっては、まずはこうした音楽事典の参考文献表を参照して、先行研究の全体像を把握しておくといいでしょう。

##### 2) データベースを活用する

最新の研究、とりわけ学術論文を探すには、オンライン文献データベースが適しています。わたしたちが論文を執筆する際によく用いる代表的なオンライン文献データベースには、CiNii Articles と RILM があります。

CiNii Articles (URL : [http://ci.nii.ac.jp/info/ja/cinii\\_outline.html](http://ci.nii.ac.jp/info/ja/cinii_outline.html)) は、日本で刊行されている学会誌・大学紀要などの学術論文情報を検索することができるオンライン・データベースで、利用登録なしに使用することができます。対して、RILM (*Répertoire International de Littérature Musicale*) は音楽文献に特化した国際的なデータベースで、学内限定アクセスとなっています。どちらも著者名やキーワードから学術論文を検索することが可能で、検索された論文がどういっ

### 3. 資料の活用法

た内容のものかは、検索結果に掲載されているキーワードや要旨から判断できます。また、近年は、論文の本文がテキスト・ファイルや PDF のかたちでデータベースから直接ダウンロードできるものも多くなっています。

#### 3) 文献は芋づる式に見つかる。だが……

音楽事典やデータベースを活用する以外に、個々の文献に記載された注や参考文献表も、文献探索の重要なツールのひとつです。先行研究を読むということは、ただ単に学説や知識を仕入れるためだけに行うのではなく、その文献の注や参考文献表から「芋づる式」に新しい文献を発見するプロセスでもあります。

しかし、また、ある時点で、文献探索をやめる勇気をもつことも重要です。文献探索にはきりがありません。興味深い論文が次々と見つかり、読みこなせないままに、気がつくともちの周りが論文のコピーの山になっているというのはよくあることです。先行研究はたくさん読めば読むほどいいというものではありません。もちろん、できるかぎり研究状況を把握しておくことは大切ですが、論文はかぎられた時間で執筆するものでもあります。また、他者の文献を読みすぎてしまったために、本来の自分の観点やテーマを見失ってしまう恐れもあるでしょう。研究がある程度の段階に入れば、きっぱりと文献探索はやめて、それまで蓄積した材料をいかに活用していくかということに切り替えるほうが賢明です。

### 5. 資料に関する情報を整理する

このようにして集めた文献については、その都度、書誌情報を整理しておくことが重要です。これは参考文献表の作成の際に必要ですし、文献を参照したり、引用したり、注をつけたりする際にいちいち必要となる情報です。こうした情報がきちんと整理されていれば、論文の執筆もスムーズに進めていくことができるでしょう。

## 4. 論文の構成

ここでは、学位論文の構成の仕方について見ていきましょう。「構成」といっても、論文の形式（体裁）に関わることと、文章の組み立てに関わることに大別できます。

### 1. 論文の形式

普通の単行本を見ると、表紙があり目次があり、という「本の形式」に沿って作られていることがわかります。学位論文を完成させるためには、論文の内容だけを書けばよいわけではなく、「学位論文の形式」に付随するいろいろな要素も整えていく必要があります。それでは具体的に、学位論文はどのような要素で構成されているのでしょうか。

#### 1) 要旨

博士論文の教務係提出稿では、扉より前に要旨を綴じる。また、要旨のファイルは論文本体とは別のファイルとして作成し、CD-R で提出する必要がある。ただし、最終稿の製本の際には、論文冒頭部分に組み入れてもよい。要旨は広く公開されるものであるため、誰が読んでも理解できるよう、わかりやすく書くこと。字数制限があるので、書き始める前に確認しておくこと。

芸術実践領域の修士論文では、要旨の提出は義務づけられていない。

#### 2) 扉

タイトル（副題も含む正式のもの）、著者名を大きめの文字で書く。専攻、博音〇〇号（博士学位取得後の最終稿製本の場合）なども入れてよい。

#### 3) 論文冒頭部分

##### (1) 前書き

博士論文の場合、謝辞（次頁を参照）をこの部分に置いてもよい（この部分ではなく、後書きの位置に置いてもよい）。謝辞以外に、研究に至るまでのいきさつ等でぜひ書いておきたいことがあればここに書く。ただし、研究内容と直接関係があるものは序論など論文本体に含めるべきなので、前書きは必要ないことが多い。

## 4. 論文の構成

### (2) 目次

論文本体だけでなく、論文冒頭部分や論文巻末部分の目次も入れる。別冊の付録資料がある場合、別冊の目次も入れるか、付録の存在のみがわかるようにして別冊の目次は入れないかはケースバイケース。

なお、論文冒頭部分（場合によっては論文巻末部分）には別の系統のページ数付けをすることもある（例えば論文冒頭部分のページ数を i, ii, iii, ... 論文本体のページ数を 1, 2, 3, ... 論文巻末部分のページ数を (1), (2), (3), ... とする等）。その場合は、目次を作る時に系統の違いがわかるようにする。

### (3) 凡例

目次の前に置いてよい。論文の中で使う表記について、説明が必要な場合はここに書いておく。例えば、論文中しばしば出てくる参考文献について毎回フルタイトルを書くと煩雑になるので略称で呼びたい場合、音名の表記法でオクターヴの違いの表現法を確認しておきたい場合、分析等で使う特殊な記号の意味について本文を読み返さなくても確認できるようにしたい場合等。

## 4) 論文本体

論文本体の構成は、序論、第1章、第2章、…、結論とすることが多い。内容が大きいくつかの部分に分かれる場合は、複数の章をまとめて第1部、第2部などとすることもある。各章は、普通、第1節、第2節、…に分ける。必要があれば、節をさらに細かく第1項、第2項、…等に分けてもよい。

## 5) 論文巻末部分

### (1) 参考文献表

論文で引用した文献は必ずここに書き出しておく。引用はしていないが参考にしたものについてはケースバイケース。一般的な情報を得るために読んだ文献は必要ないが、内容の理解に必要と思われるものは入れること。

文献だけでなく、楽譜、音源や映像（CD、DVD等）、ウェブサイト等についても同様にする。

一般的には、外国語文献、日本語文献、楽譜、録音録画、ウェブサイト等参考資料の種類ごとに分ける。それぞれの種類について、著者名のアルファベット順（日本語のものについてはあいうえお順）に並べる。

### (2) 謝辞

博士論文では、必須ではないが、謝辞を含めることがある。謝辞の対象は、指導教員など論文執筆に関する直接の指導者や学位審査の審査員の他、研究の過程で援助してもらった個人や施設があればそれも含める（例えば研究資金の助成を受けた場合の助成団体、入手しにくい研究資料を使った場合の入手先、執筆途中の原稿を読んでアドバイスをくれた人物等）。演奏面のみでの



指導者も含めてよい。それ以外の様々なサポートについても、特に重要なものがあれば入れてよい。

謝辞は、この部分ではなく、前書きの位置に置いてよい。

### (3) 後書き

謝辞以外に、研究を終えての感想等、論文の内容以外でどうしても書いておきたいことがあれば「後書き」としてここに入れる。

### (4) 付録資料

内容的、あるいは分量的に本文の中に入れない方がよいと思われる資料については、まとめて巻末に載せておく。分量が多ければ別冊にしてもよい。

例えば、分析結果や分析に使った生データ、譜例、写真や図表、歌詞やその対訳等が考えられる。自分が作成したもの以外を載せる場合は、著作権の侵害にならないよう注意すること。

以上、標準的と思われる「学位論文の形式」を示しました。しかし、これはあくまでも参考であり、ここにあげた全ての要素をそろえなければいけないという訳ではありません。論文の性格によっては凡例が必要ない場合もあるでしょうし、謝辞は大きすぎるので入れたくないと考える人もいるでしょう。また、要素を並べる順番もこの通りにする必要はありません。迷う場合には、過去の学位論文を参考にするのがよいでしょう。できれば何冊か（読まなくてもよいので）閲覧して、自分の修士・博士論文に必要な要素についてのイメージを持つようにすることをお勧めします。

## 2. 文章の構成

学術論文の文章を構成する際には、小説や楽曲解説の文章とは少し違うところに注意する必要があります。全体的なところから細かい方へ順に見ていきましょう。

### 1) 論文全体の結論は？

論文全体として結局何が言いたいのか、明確になっているだろうか。もちろん音楽の問題は微妙で、一言で言えるような結論が出せない場合も多いだろう。しかし「この問題はこのように複雑なので、単純化してはいけない」という主張も立派な結論である。最終的な結論に向かうように論文全体が構成されていると、非常に読みやすくなる。

### 2) 章立ての決め方

通常は「研究の前提」→「実際に研究した内容」→「そこから何が言えるか」の順とすることが多い。「研究の前提」とは、自分がその問題を重要だと考えるようになった理由や、先行研究

#### 4. 論文の構成

の状況等である。最終的に何を言いたいかについては論文冒頭で予告することが多いが、最後まで読んで初めてわかるという推理小説のようなやり方も可能である。

##### 3) 各段落の構成

基本的には「1つの段落では1つのことだけを主張する」と考えるとよい。1つの段落がとても短い時（1文だけの段落は短すぎるが多い）には、関連することを主張している他の段落と一緒にできるかもしれない。逆に1つの段落がとても長い時（数ページにわたる段落は読みづらいことが多い）には、複数の主張が盛り込まれているのではないかと考える必要がある。

文章を見直す際には、1文ずつ見るだけでなく、全体の流れも見てみよう。いくつかの段落を並べる順序を変えるだけで文章がすっきりすることが多い。例えば、読者が「なぜ？」と質問したくなるようなことを主張していたら、その理由を説明する段落を近くに置く方がよいだろう。また、ほとんど同じ内容を別の個所で繰り返していたりしないだろうか。強調や整理のために繰り返すことは大切だが、意味のない繰り返しは避けたい。話題が飛躍してしまっている時には、その段落を別の節や章に持っていくことができないか考えてみよう。

##### 4) 論理的な文章を書くための注意


(1) 現在書いていることが、次のうちどれなのかがはっきりわかるように書く。「事実を述べたもの」「自分の感じたこと」「誰かが言ったこと」「それまでに書いた内容から導き出されること」等である。

(2) いくつかの項目を列挙する場合には、各項目の性格をそろえるとよい。性格が違うように見える項目でも、論文のその個所で言いたいことに合わせて加工することにより、合わせることは可能である。例えば「曲想の表現にはこの指使いがよい」と「この曲の出版譜には間違いが多い」ことは性格が異なるのでそのまま並べることはできない。しかし、特定の曲の演奏のために準備すべきこととして「出版譜に間違いがないか確認すること」と「どのような指使いがよいか決めておくこと」を並べることはできる。

(3) 個々の文について、「主語と述語が対応しているか」「文の途中でいつのまにか主語が変わったりしていないか」を意識する。また、文と文をつなぐための接続詞やそれに相当する語句が適切に使われているか注意する。

自分の書いた文章の問題点には気づきにくいものです。途中まで書いた段階で、原稿を誰かに読んでもらう機会を積極的に作るようにしましょう。家族や友人等でも構いません。指導教員の先生方のように内容に関する判断をすることは無理でも、誤字脱字や文章のわかりにくい点を指摘してもらえれば修士・博士論文のレベルアップにつながります。

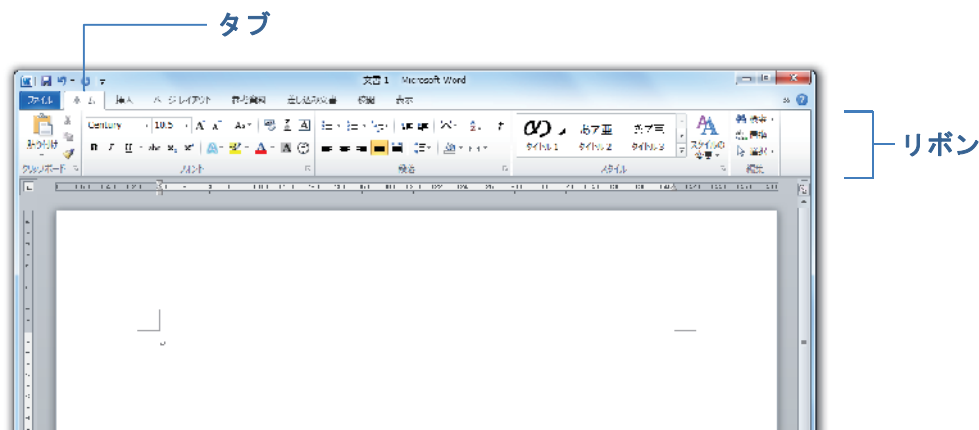
## 5. Word の使い方

ここでは、論文を執筆する際に役立つ Word の基本操作について説明します。入力作業は問題なくできる方を対象にしていますので、Word 初心者の方は「活用しよう！ワード」タブや Microsoft Word ヘルプ（画面右上の ）をご覧ください。

現在（2013 年 3 月）の利用状況から、Windows の Microsoft Word 2010 に則っています。Macintosh の Word では操作方法が若干異なりますが、基本的な機能は同じです。下記の図にある「リボン」や様々な「タブ」のほか、Word 2010 の画面構成については、下記 URL のほか、Microsoft Word ヘルプを参照してください。

[参照 URL <http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/cc872782.aspx>]

なお下記に掲載する書式は規則ではなく、あくまで一例です。より美しいレイアウトを目指して、適宜、変更してください。『論文作成の手引き』（2011 年改訂）に掲載されている書式も合わせて参照しましょう。



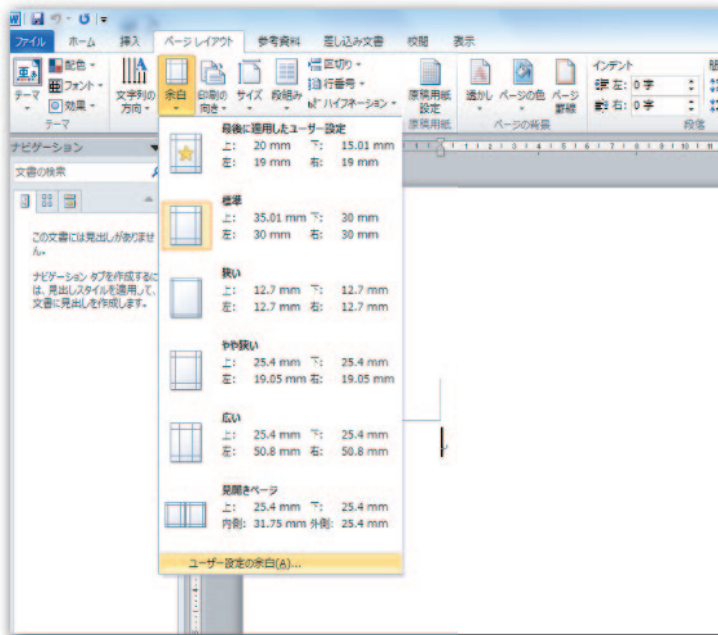
### 1. 基本編 （レイアウト設定）

#### 1) 余白の設定

❖ 教務係提出時（縦おき A4 上綴り、2 穴、紐綴じの際）

- ① 上にある「リボン」から「ページレイアウト」タブをクリック
- ② 「余白」アイコンをクリックし、最下段の行「ユーザー設定の余白」をクリック

## 5. Word の使い方



- ③ 「ページ設定」画面が開くので、「余白」タブをクリック
- ④ 「余白」の設定欄で「上」を「40 mm」、「下」を「30 mm」、「左」を「30 mm」、「右」を「30 mm」に設定

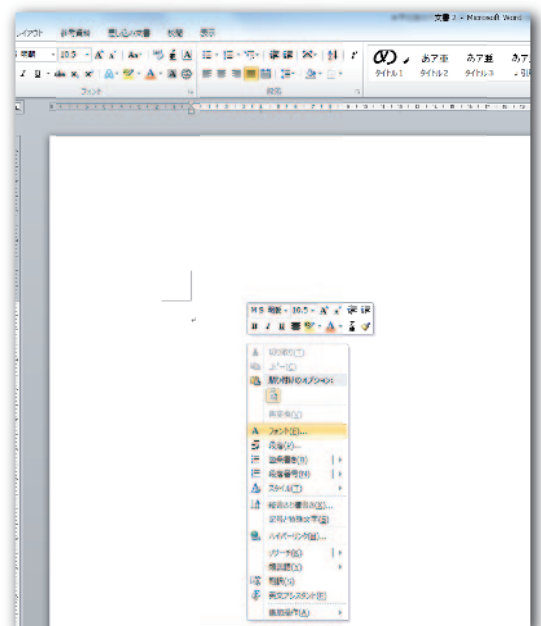
### ❖ 製本提出時（縦向き A4 横綴り）

- ①～③同上
- ④ 「複数ページの印刷設定」欄の「印刷の形式」で「見開きページ」を選択
- ⑤ 「余白」の設定欄で「上」を「40 mm」、「下」を「30 mm」、「内側」を「35 mm」、「外側」を「25 mm」に設定

## 2) フォント・文字サイズの設定

### ❖ 全体の書式として設定する場合

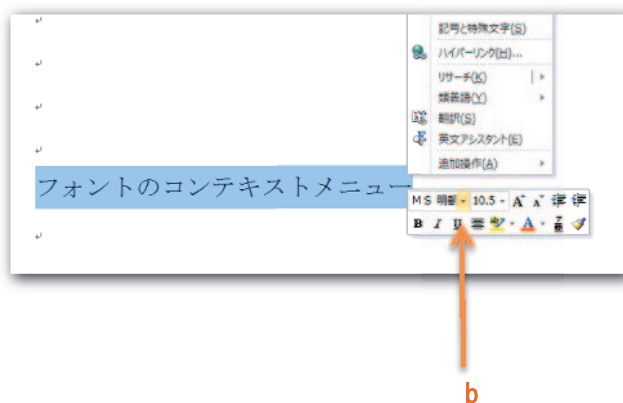
- ① 本文スペースの上で右クリックし、出てきたコンテキストメニューから「フォント」を選択
- ② 「フォント」タブの画面上で、「日本語用のフォント」を「MS 明朝」、「英数字用のフォント」を「Times New Roman」、「サイズ」を「10.5」に設定（この設定にすると、一桁や一文字の英数字が日本語文章の中に混在しても、詰まった感じになりません）
- ③ 左下のアイコン「既定に設定」をクリックし、設定対象を「この文書だけ」にして「OK」をクリック（いつ操作しても、本文のすべての文字に適用されます）



## ❖ 一部の箇所のみ反映させる場合

画面に表示されるメニューは、設定によってさまざまに変えられます。ここでは、どういうメニュー画面でも対応できるように、3パターンを紹介します。

- 変えたい箇所を範囲指定してから上記①～②の手順を行い、「OK」をクリック
- 変えたい箇所を範囲指定し、右クリックすると現れるフォントのコンテキストメニューで、まず「MS 明朝」を指定し、そのまま続けて「Times New Roman」を指定する



- 変えたい箇所を範囲指定し、上の「リボン」の「ホーム」タブの「フォント」グループに表示されているフォントのドロップダウンリストから、まず「MS 明朝」を指定し、そのまま続けて「Times New Roman」を指定する

## 3) 行間・両端揃え

## ❖ 全体の書式として設定する場合

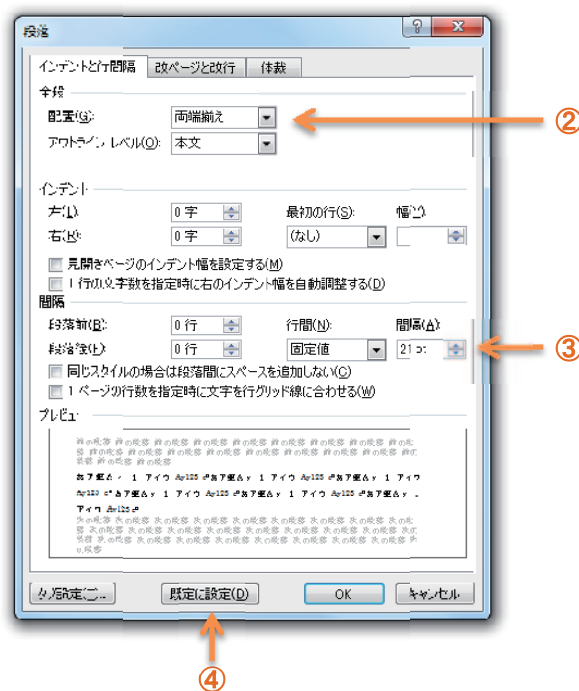
- 本文スペースの上で右クリックし、出てきたコンテキストメニューから「段落」を選択
- 「インデントと行間隔」タブの画面の「全般」欄で、「配置」を「両端揃え」に
- 同画面の「間隔」欄で、「行間」を「固定値」にして、「間隔」を「21 pt」に
- 下にある「既定に設定」アイコンをクリックし、設定対象を「この文書だけ」にして「OK」をクリック

## ❖ 一部の箇所にもみ反映させる場合

変えたい箇所を範囲指定し、上記①～③の手順を行い、「OK」をクリック

## ❖ 「両端揃え」の設定にしたために、英数字の前後が不自然に間延びしてしまう場合

変えたい箇所を範囲指定し、上記②の「配置」を「文字列を左に揃える」にするか、単語の場合は音節で「- (ハイフン)」を入れて区切り、改行する

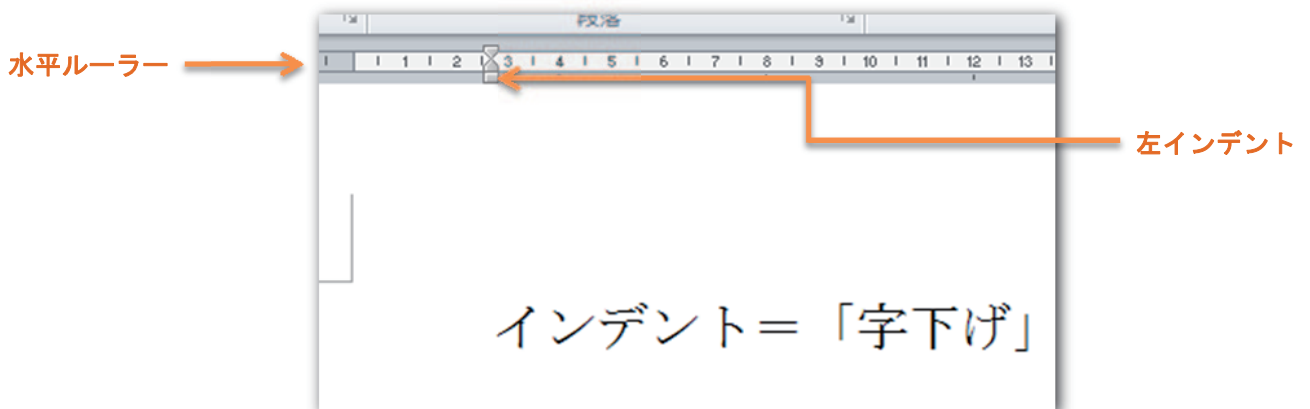


## 5. Word の使い方

### 4) 引用：インデント（字下げ）の設定

#### ❖ 3 行以上の長い引用の場合

- ①引用文のテキストを入力
- ②引用文全体をカーソルで範囲指定し、「水平ルーラー」（画面上方にある物差しのような数字つきライン）の左側にある長方形「左インデント」を目盛り 2.5 位まで右に動かす（文字サイズが 10.5p の場合、3 文字分が字下げされます）（「左インデント」を動かすと、上の 2 つの三角も一緒に動きます）
- ③段落が複数になる場合は、各段落の行頭をさらに 1 字下げる



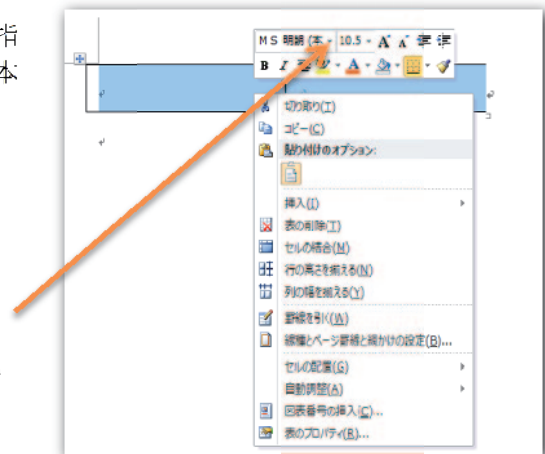
### 5) 歌詞対訳の掲載

#### ❖ 原語と日本語訳など 2 種類のデータを、表で対照させながら掲載する

- ①上の「リボン」から「挿入」タブをクリック
- ②「表」アイコンをクリックし、必要な枠を範囲指定（次頁の例 1 では 1 行×2 列=□□）すると、本文中に表ができる
- ③枠線を適当な大きさに動かして調整する

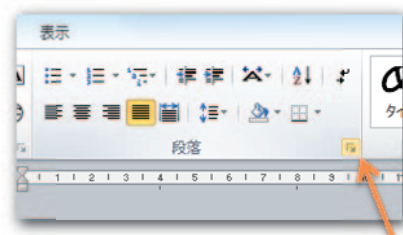
#### ❖ 表内のフォント・文字サイズを設定する

現れた表の全体を範囲指定し、右クリックすると「フォント」のミニツールバーが出てくるので、フォントのドロップダウンリストからまず「MS 明朝」を指定し、続けて「Times New Roman」を指定する



#### ❖ 表内の行間隔を設定する

- ①同じく表全体を範囲指定してから、「リボン」の「ホーム」タブをクリックし、真ん中にある「段落」グループから、**ダイアログボックス起動ツール**（「段落」という文字の右側にある矢印）をクリック

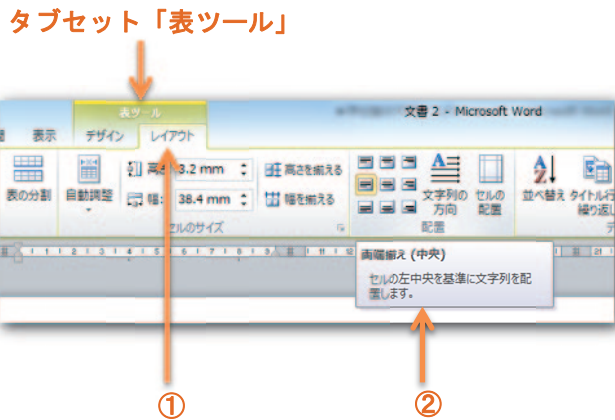


ダイアログボックス起動ツール

②開いた「段落」ダイアログボックス上で、「インデントと行間隔」タブの「間隔」欄で、「行間」を「固定値」にし、「間隔」を適当な値に変える。

❖ 表内のテキスト位置を設定する

- ①表内のどこかをクリック or 範囲指定すると、リボン上部にオレンジ色で表示されるタブセット「表ツール」が現れるので、この「表ツール」タブをクリックし、さらにその下位に収められている「レイアウト」タブをクリック
- ②「配置」グループより、希望するレイアウトのアイコンを選択



❖ 表の罫線を変更する

- ①同様に、タブセット「表ツール」から、今度は「デザイン」タブをクリック
- ②右側の「罫線の作成」グループにある「罫線を引く」アイコンをクリックすると、カーソルが鉛筆の形となり、表に線を加えることができる（「罫線を引く」アイコンをもう一度押すと、カーソルに戻ります）
- ③罫線を消すときは、「罫線の削除」アイコンをクリックし、操作する
- ④罫線の線種・太さは、上記のアイコンの左にあるドロップダウンリストから選択し、適宜調整する

【例 1】 ガブリエル・フォーレ 〈夢のあとに Après un rêve〉 Op.7-1 冒頭

<p>Dans un sommeil que charmaient ton image                  Je rêvais le bonheur, ardent mirage,                  Tes yeux étaient plus doux, ta voix pure et sonore,                  Tu rayonnais comme un ciel éclairé par l'aurore;</p>	<p>君の姿にうっとりとした夢の中で、                  僕は燃えるような幻影である幸せを夢みていた。                  君の目はさらにやさしく、君の声は澄んで響きわたった。                  君はあけぼのに照らし出された空のように輝いていた。<sup>1</sup></p>
--	--

文字サイズ 8.5 p、行間隔 14 p、  
 両端揃え（中央）、線の太さ 0.5 p

6) 譜例などの図の挿入

❖ PDF から楽譜などの一部をコピー&ペースト（貼り付け）する

- ①PDF ファイルで該当箇所を範囲指定し、右クリックすると、「画像をコピー」コマンドが出てくるので、これをクリック
- ②Word の当該箇所ペースト（Ctrl+V）する
- ③（行間隔を設定したレイアウトでは、1 行分しか表示されていないので、）図上で右クリックし、コマンド画面の「文字列の折り返し」から、「前面」を選択  
 （「前面」を設定すると、テキストの前面に図が重なる形で表示されますが、ドロップ移動が

<sup>1</sup> 金原礼子『フォーレの歌曲とフランス近代の詩人たち』 東京：藤原書店、2002 年、541～42 頁。



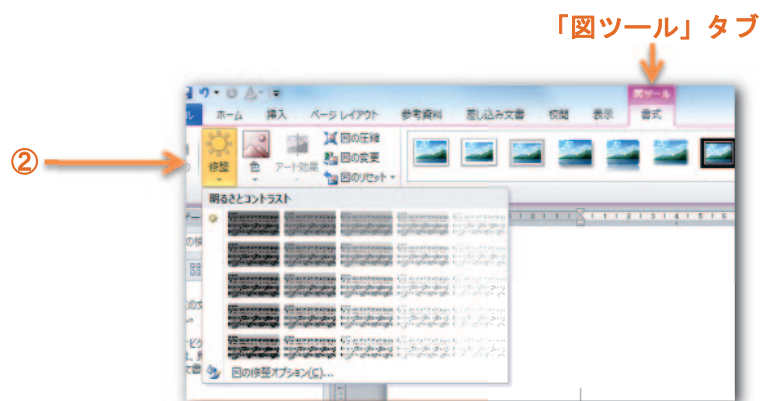
## 5. Word の使い方

スムーズです。「四角」や「外周」では、テキストが図を囲む形で表示されます)

- ④図上でクリックすると枠の四隅に○が現れるので、これを適宜動かしてサイズを調整する  
(四辺の中央にある○を動かすと、縮尺が変わってしまうので注意しましょう)
- ⑤掲載したい場所に図を移動し、周りのテキストとの位置を調整する

### ❖ 画像を調整する

- ①挿入した図をクリックすると「リボン」の上に現れるピンク色の「図ツール」タブをクリック
- ②左側にある「調整」グループの「修整」アイコンをクリックし、「明るさとコントラスト」のリストボックスで調整する  
(それでも画像が粗く見えにくい場合は、使用を断念して別の掲載方法を考えましょう)



### ❖ 自分でスキャンした画像や、別の jpg などのファイルを挿入する

- ①「リボン」から「挿入」タブを選択し、「図」グループから「図」アイコンをクリック
- ②「図の挿入」画面が表示されるので、該当ファイルを選択
- ③挿入後の調整は、2つ前の PDF の説明の③～⑤と同じ

※IMSLP から楽譜 PDF を使用する場合は、著作権が切れている資料に限ります

※PDF 化されている元資料の書誌も必ず掲載しましょう

【例 2】 J. ブラームス 《7つの歌》Op.48 第1曲〈恋人のもとに向かう道〉冒頭<sup>2</sup>

Con grazia

Singstimme

1. Es glänzt der Mond nie . der, ich soll . te doch wie . der zu mei . nem

Pianoforte

<sup>2</sup> IMSLP, s.v. "Complete Score (filter)," in "7 Lieder, Op.48 (Brahms, Johannes)," (Johannes Brahms, *Sämtliche Werke*, Band 24, Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1926-27, Plate J.B. 147), accessed January 6, 2013, [http://conquest.imslp.info/files/imglnks/usimg/f/fc/IMSLP81908-PMLP22011-Brahms\\_Werke\\_Band\\_24\\_Breitkopf\\_J\\_B\\_147\\_Op\\_48\\_filter.pdf](http://conquest.imslp.info/files/imglnks/usimg/f/fc/IMSLP81908-PMLP22011-Brahms_Werke_Band_24_Breitkopf_J_B_147_Op_48_filter.pdf)



## 7) ページ数字の挿入

- ①「リボン」の「挿入」タブを選択し、「ヘッダーとフッター」グループの「ページ番号」アイコンをクリック
- ②「ページの下部」の「真ん中」を選ぶ
- ③数字のフォント・サイズを変えたいときは、数字を範囲指定してから右クリックすると「フォント」のミニツールバーが出てくるので、そこで文字やサイズを設定する

## 8) 改ページの挿入（改行をたくさん入れることなく、次のページに移る）

### ❖ 改ページを挿入する

「リボン」の「挿入」タブを選択し、「ページ」グループの「ページ区切り」をクリック

### ❖ 挿入した改ページを取り消したい時

上記の作業で挿入された「————— 改ページ —————」を消去する

## 9) 脚注を入れる

### ❖ 脚注数字を挿入する

- ①「リボン」から「参考資料」タブをクリック
- ②「脚注」グループから「脚注の挿入」アイコンをクリック
- ③自動的に数字が振られ、脚注欄に移る
- ④脚注内で右クリックし、「脚注と文末脚注のオプション」をクリック
- ⑤「書式」欄の「番号の付け方」で「連続」を選択し、「挿入」をクリック（すべてのページにわたる通し番号になります）

### ❖ 文字サイズを設定する

- ①脚注内で全範囲指定し（Ctrl+A）、2）フォント・文字サイズの設定の手順で、「サイズ」を「9」に選択（「既定に設定」をクリックしなければ、本文には反映されません）

### ❖ 行間を設定する

- ①脚注内で全範囲指定し（Ctrl+A）、その上で右クリック
- ②出てきた画面で「段落」を選択
- ③「段落」画面で「間隔」欄の「段落後」を「0.2 行」に入力、行間を「固定値に」、「間隔」を「12p」に設定する（改行ごとに若干のスペースができ、詰まった感じになりません）

## 10) 書誌

### ❖ 2 行目以降を字下げする：巻末の参照資料の場合

- ①該当箇所を範囲指定し、水平ルーラーの左側にある 2 つの三角形のうち、真ん中にある上向きの三角形「ぶら下げインデント」のみを 2.5 程度まで（文字サイズが 10.5 の場合）右に動かす（1 行目はそのまま、2 行目以降が 3 文字分、字下げされます）



## ❖ 見出し or 項タイトルをスタイル設定する

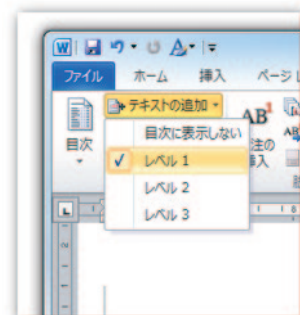
- ①【初出時】見出し or 項タイトルを入力し、フォントを「MS ゴシック」、文字サイズを「10.5」に設定
- ②上記と同様の手順で、「見出し」 or 「項タイトル」というタイトルを作り、2 回目以降はこのスタイルを選択する

## 2) 目次の作成

本文中の章・節・見出し (or 項) のタイトルから、目次を作る機能です。この機能によって、ページ数字が表示された目次ページを簡単に作成することができます。

## ❖ 章タイトルを目次の「レベル 1」に設定する

- ①章タイトルを範囲指定した後、「リボン」の「参考資料」タブから、「目次」グループにある「テキストの追加」をクリックし、リストボックスを開く
- ②「レベル 1」を選択



## ❖ 節タイトルを目次の「レベル 2」に設定する

上記と同様に、「レベル 2」を選択

## ❖ 見出し or 項タイトルを目次の「レベル 3」に設定する

同様に、「レベル 3」を選択

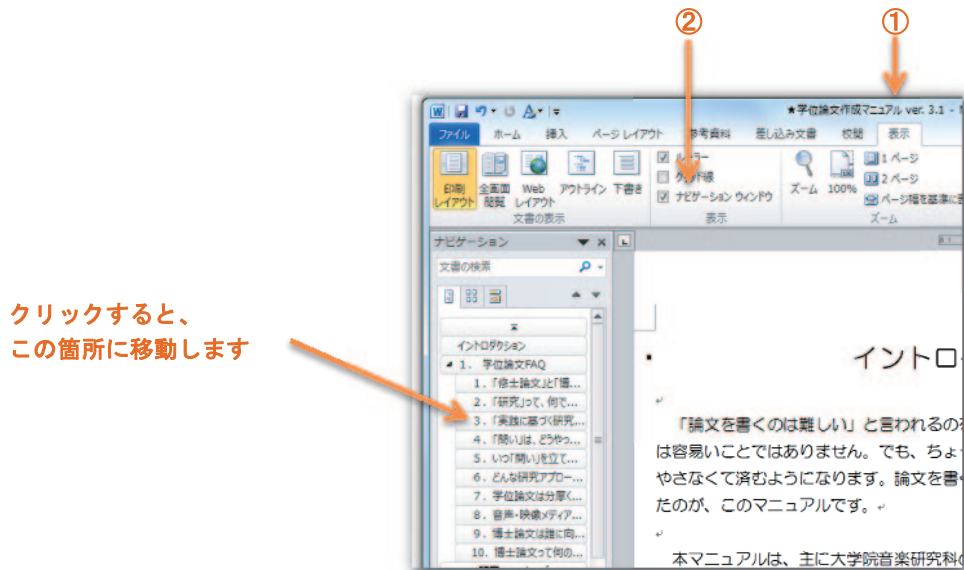
## ❖ 目次を作る

- ①目次を作りたいページ箇所にカーソルを置き、「リボン」の「参考資料」タブから、「目次」グループの「目次」アイコンをクリック
- ②「目次の挿入」をクリック
- ③現れた「目次」画面で OK をクリック

## ❖ 目次に表示されている一連のタイトルを、入力画面左側に常に表示する

- ①「リボン」の「表示」タブをクリック
- ②「表示」グループにある「ナビゲーションウィンドウ」にチェックを入れ、「ナビゲーションウィンドウ」を表示する (飛びたいタイトルをクリックすると、その箇所に移動します)

## 5. Word の使い方



### ❖ 一旦、目次を作成した後に、最新のページ数字を目次に反映させる

- ① 「リボン」の「参考資料」タブから「目次」グループの「目次の更新」アイコンをクリック
- ② 「目次の更新」画面で、「ページ番号だけを更新する」を選択し、OK をクリック

### ❖ 一旦、目次を作成した後に、最新のタイトルを目次に反映させる

- ① 「リボン」の「参考資料」タブから、「目次」グループの「目次の更新」アイコンをクリック
- ② 「目次の更新」画面で「目次をすべて更新する」を選択し、OK をクリック

## 3) 図番号・譜例番号、各リストの作成

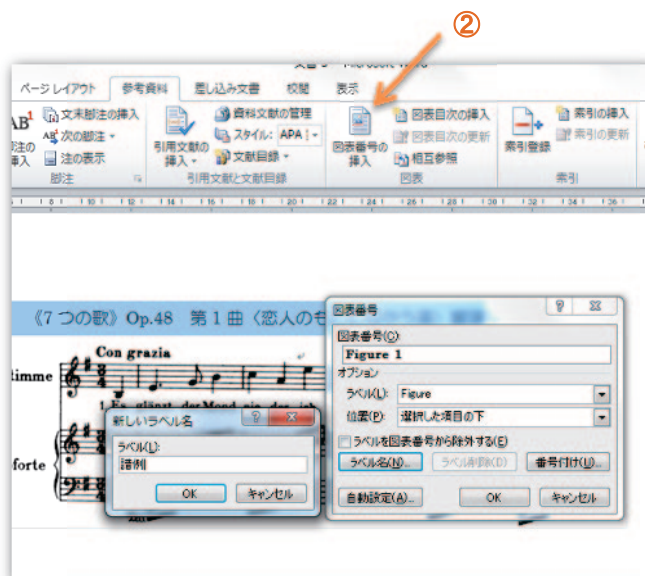
図、譜例に自動的に通し番号をつけます。またその一覧を上述の目次と同じように作成することができます。

### ❖ 図番号を挿入する

- ① 【初出時】図の見出しを入力し、範囲指定する
- ② 「リボン」の「参考資料」タブから、「図表」グループの「図表番号の挿入」アイコンをクリック
- ③ 「図表番号」が「図 1」に、「ラベル」が「図」になっていることを確認し、OK をクリック
- ④ 【2 回目以降】同様の手順で、「図 2、3…」と自動的に番号を割り付ける

### ❖ 譜例番号を挿入する

- ① 【初出時】譜例の見出しを入力し、範囲指定する
- ② 「リボン」の「参考資料」タブから、「図表」グループの「図表番号の挿入」アイコンをクリック
- ③ 「ラベル名」アイコンをクリックし、「新しいラベル名」画面で「譜例」と入力し、OK をクリック



- ④ 「ラベル」欄のドロップダウンリストに「譜例」が加えられているのでこれを選択し、OK をクリック
- ⑤ 【2回目以降】同様の手順で、「譜例 2、3…」と自動的に番号を割り付ける

#### ❖ 図一覧を作成する

- ①目次の最後など、一覧を作りたい箇所にカーソルを置き、「リボン」の「参考資料」タブから、「図表」グループの「図表目次の挿入」アイコンをクリック
- ②「図表目次」タブで「図表番号のラベル」が「図」になっていることを確認し、OK をクリック

#### ❖ 譜例一覧を作成する

- ①上記②で「図表番号のラベル」が「譜例」になっていることを確認し、OK をクリック

#### ※便利なキーボード・ショートカット (for Windows)

保存	<b>Ctrl</b> (左手前にあるコントロール・キー) + 「S」
すべて選択する	<b>Ctrl</b> + 「A」
コピー	<b>Ctrl</b> + 「C」
ペースト	<b>Ctrl</b> + 「V」
検索	<b>Ctrl</b> + 「F」
置換	<b>Ctrl</b> + 「H」 [用語 A を用語 B に (一気に) 変換します]
元に戻す	<b>Ctrl</b> + 「Z」 [今の一手待った、という時に]
イタリック (斜体字)	<b>Ctrl</b> + 「I」
太字	<b>Ctrl</b> + 「B」

## 6. 参考文献のまとめ方

「巨人の肩の上に立つ」という言葉にあらわれているように、私たちは先人の残してきたものとまったく無関係に自身の研究を進めていくことはできません。どのような資料や先行研究をどう活用しながら自分の論を展開しているのか、論文末の参考文献表は、その研究が拠って立つ位置を明瞭に映し出す、とても重要なものです。そして、後から検証することができるよう、情報を誰にでもわかりやすくまとめることが求められます。

### 1. 資料を分類する

それぞれの研究対象や研究方法によって、必要とされる資料は様々な形態をとっています。文献表をまとめるにあたっては、こうした形態によって、資料を整理、分類する必要があります。先行研究には、雑誌論文、単行本、学位論文、事典項目など様々な形を取るものが含まれますし、特に音楽を対象とした論文では、楽譜や音響資料、映像資料も重要となることが少なくないでしょう。これらをすべて一緒にしてしまうと文献表としては要領を得ないものになってしまいますし、細かく分類しすぎても繁雑で読みにくいものになってきます。どのように分類するのか、絶対的な基準を決めることはできませんが、大きく「文字情報」「楽譜情報」「視聴覚情報」のように分けることができるでしょう。また、インターネット上の情報を利用する場合には、こうした分類にあてはめられないこともあります。その場合には「オンライン情報」をひとつのまとまりとして整理することも考えられます。

### 2. 資料を順序よく並べる

分類した様々な資料は、誰もが容易に資料にアクセスできるように決まった順序で配列する必要があります。多くの場合、資料の著者の名前(姓)に準じて五十音順、もしくはアルファベット順に並べるのが一般的です。このため、参考文献表では、著者の名前を「姓、名」の順に書き記すようにします。また、著者名が順序を決める基準となることが多いため、日本語の文献(五十音順に配列することが多い)と、欧文の文献(アルファベット順に配列するのが基本)とを大きくわけてまとめるとわかりやすいようです。

### 3. 資料の情報を的確に記述する

それぞれの資料については、基本的に「誰が」「何を」「どこで」「いつ」の4点を踏まえて整理していくことができます。文献の執筆者名（誰が）、書名や論文名（何を）、出版地や出版社（どこで）、出版年（いつ）といった情報をもれなく押さえていくことで、後からその文献に簡単にたどり着くことができます。もちろん、資料の中には様々な形をとるものがあり、必ずしもこれらの情報すべてが揃わない場合（たとえば、執筆者名がわからない事典の項目や新聞・雑誌記事など）もあれば、プラスアルファの情報が必要な場合（論文集所載の一論文を取り上げるなら、論文の題名、執筆者名だけではなく、論文集そのもののタイトルや編者についての情報）も考えられます。

参考文献についての諸情報を厳密にどのように記していくのか、筆記のスタイルにはいくつかのタイプがあり、研究の分野によって多用される書式には差が見られることもあります。どのスタイルで情報を書き記すのかは、研究対象、研究方法、集められた資料の種類によって適切なものを選択する必要がありますが、いずれにしても論文の中で用いるスタイルはひとつに統一することが重要です。ここでは東京藝術大学音楽学部『論文作成の手引き』（2011年版）にほぼ準じる形で、その一例を挙げておきます。

#### 1) 文字情報（和書）

\* 単行本 著者名『書名』 出版地：出版社、出版年。

例) 服部幸三『西洋音楽史 バロック』 東京：音楽之友社、2001年。

例) ボール、フィリップ『音楽の科学——音楽の何に魅せられるのか』夏目大訳、東京：河出書房新社、2011年。

\* 雑誌論文 執筆者名「論文名」、『雑誌名』 巻号、年、頁。

例) 服部幸三「音楽史学に於ける時代様式の問題」、『美学』 第2巻2号、1951年、33～44頁。

\* 事典項目 執筆者名「項目名」、『事典名』 出版地：出版社、出版年、巻、頁。

例) 上参郷祐康「尺八」、『音楽大事典』 東京：平凡社、1982年、第3巻、1052～1063頁。

例) Donington, Robert 「演奏解釈 interpretation」、『ニューグローヴ世界音楽大事典』 荒川恒子訳、東京：講談社、1994年、第3巻、338～339頁。

\* 事典項目（執筆者不明） 「項目名」、『事典名』 出版地：出版社、出版年、巻、頁。

例) 「王室礼拝堂 royal chapel」、『ニューグローヴ世界音楽大事典』 東京：講談社、1994年、第3巻、359頁。

## 6. 参考文献のまとめ方

### 2) 文字情報 (洋書)

\* 単行本 著者姓, 名. 書名. 出版地: 出版社, 出版年.

例) Schulenberg, David. *The Keyboard Music of J. S. Bach*. London: Victor Gollancz, 1993.

\* 雑誌論文 執筆者姓, 名. “論文名.” In 雑誌名 巻/分冊 (月 年): ページ.

例) Breig, Werner. “Versuch einer Theorie der Bachschen Orgelfuge.” In *Musik-forschung* 48/2 (1995): 14-52.

\* 事典項目 執筆者姓, 名. “項目名.” In 事典名, 版次, 巻, ページ.

例) Davies, Stephen and Stanley Sadie. “Interpretation.” In *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 2<sup>nd</sup> ed., vol. 12, pp. 497-499.

\* 事典項目 (執筆者不明) 事典名. 版次. s.v. “項目名.” 巻, ページ.

例) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 2<sup>nd</sup> ed. s.v. “International Music Council.” vol. 12, pp. 494-495.

### 3) 楽譜情報

\* 基本例 作曲者姓, 名. 曲名. 編集者. 出版地: 出版社, 出版年.

例) Bach, Johann Sebastian. *Inventionen und Sinfonien*. Edited by R. Steglich. Fingering by W. Lampe. München: Henle, 1954.

例) バッハ、ヨーハン・セバスティアン『ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハのためのクラヴィーア小曲集』 プラート校訂 (1962)、東京: 全音楽譜出版社、1980年。(ベーレンライター原典版 34)

### 4) 視聴覚情報

\* 基本例 作曲者姓, 名. 曲名. 演奏者. レーベル名: 発売番号 (資料の種類), トラック番号. 録音年, 発売年.

例) Bruckner, Anton. *String Quartet in C Minor*. Bruckner Quartet. Camerata: 32 CM-256 (CD), tracks 1-4. Recorded 1991, released 1992.

例) Lully, Jean-Baptiste. *Atys*. William Christie, conductor; Les Arts Florissants. Opéra Comique: EDV1610-FRA506 (Blu-ray Disc), Recorded 2011, released 2011.

### 5) オンライン情報

\* 基本例 著者・発行者名. 文書名. URL. アクセス年月日.

例) Leech-Wilkinson, Daniel. *The Changing Sound of Music: Approaches to Studying Recorded Musical Performance*. (London: CHARM, 2009)



<http://www.charm.rhul.ac.uk/studies/chapters/intro.html>. accessed December 18, 2012.

\* オンライン辞典 執筆者名. “項目名.” 事典名. URL. アクセス年月日.

例) Davies, Stephen and Stanley Sadie. “Interpretation.” *Grove Music Online. Oxford Music Online*. <http://www.oxfordmusiconline.com/subscriber/article/grove/music/13863>. accessed January 3, 2013.

\* オンライン事典 (執筆者不明) 事典名. s.v. “項目名.” URL. アクセス年月日.

例) *Grove Music Online. Oxford Music Online*. “International Music Council.” <http://www.oxfordmusiconline.com/subscriber/article/grove/music/13855>. accessed January 3, 2013.

文献の書式に関しては、前述の『論文作成の手引き』にさらに詳細な例が挙げられています。また、以下の資料にも書式の例がありますので、参照して自身の研究資料に一番適したスタイルで文献表をまとめてください。

#### 4. 参考図書

ウィンジェル、リチャード J. 『音楽の文章術——レポートの作成から表現の技法まで』 宮澤淳一、小倉眞理訳、東京：春秋社、1994 年。

佐藤望編著『アカデミック・スキルズ——大学生のための知的技法入門』 東京：慶應義塾大学出版会、2006 年。

独立行政法人科学技術振興機構編『参考文献の役割と書き方——科学技術情報流通技術基準 (SIST) の活用』 (2011 年 3 月発行)

[http://sti.jst.go.jp/sist/pdf/SIST\\_booklet2011.pdf](http://sti.jst.go.jp/sist/pdf/SIST_booklet2011.pdf). 2013 年 1 月 3 日参照。

## 7. 博士論文作成計画の立て方

※本章は、博士論文を念頭に記述されていますが、  
修士論文の執筆にあてはまることも多く書かれています。  
適宜参考にしてください。

研究のテーマや内容がほぼ決まったら、研究計画を立ててみましょう。作曲や演奏などの音楽活動と論文を書くという作業を両立させるのは、決して容易なことではありません。しかし、最初からきちんと計画を立て、早めに準備を始めれば、音楽活動に支障をきたすことなく、時間的にも精神的にも余裕を持って論文に取り組むことができます。では、入学から3年で論文を完成させるためには、いつ頃までに何をすればよいのか、またどのように計画を立てればよいのか、順を追って見ていきましょう。

### 1. 計画を立てるまえに

重要なのは、音楽家としての今後のスケジュールを確認してから、論文作成の計画を立てることです。学位審査演奏会や学位審査作品の準備だけでなく、演奏会のリハーサルと本番の日程、作曲の締切日、コンクール、オーディション、海外渡航、留学の予定などを確認してみましょう。すると、論文作成にどれだけの時間を割くことができるのかが明確になります。つまり、**具体的な論文作成計画を立てるためには、作曲や演奏を含む3年間のあらゆる活動を考慮に入れる必要がある**のです。

そこで、3年間の予定を一度に見渡せる研究計画表を作成してみたいかどうか(表1)。まず、「学位審査演奏会／作品」欄に、博士特別研究(博士リサイタルまたは作品発表)の予定と学位審査演奏会や学位審査作品の準備計画を記入します。次に、「学事暦」欄に指導教員会議の日程を、「音楽活動」欄に演奏会やコンクールの日程などを書きます。最後に「論文作成計画」欄に、論文の研究計画を書き込んでいきます。

### 2. 論文提出までの流れ

論文を完成させるまでの間には、本文の執筆だけでなく、資料や情報の収集、先行研究の精査、研究の対象と方法の検討、章立ての構想、参考文献表・譜例・図表等の作成、文章の推敲と校正

など、さまざまな作業行程があります。テーマや研究方法により異なりますが、参考までにその一例を表1に示しました。基本的にはこのような過程を経て、論文が完成します。

1年次の前期は、研究の準備を行います。論文の仮題目を決め、それに基づいて資料や情報を探索・収集し、先行研究を精査していきます。その過程で指導教員の先生方と相談しながら、自分の研究がどのような点で新しく独創的であると言えるのか、アイデアを整理し、研究対象と研究方法をしぼり込んでいきます。1年次後期から、論文の核となる研究調査を始めます。提出の1年前にあたる2年次の10月頃から、本格的な論文執筆を開始するのが理想的です。この時期から約50週かけて論文を執筆することになります。3年次は、研究内容をさらに深めつつ論文の形を整え、推敲を重ねて仕上げていきます。

### 3. 論文作成計画の例

#### 1) 研究の準備段階

研究テーマは入学後すぐに決めます。1年次の4月末までに、研究テーマと3年間の研究計画を記した「研究計画書」を教務係に提出する必要があるからです。それまでに主任指導教員と相談のうえ、論文の仮題目を決めましょう。正式な論文題目は、論文を提出する3年次の4月末までに決めれば大丈夫です。この時期に、学位予備申請書類に正式な論文題目を記入して教務係に提出します。

研究テーマが決まったら、資料や情報の探索と収集を行い、先行研究を精査します。研究の視点や方法にもよりますが、自分の研究テーマに関連する資料や情報がどれだけあるのかをなるべく早く把握する必要があります。それにより、研究の糸口がみつかったり、焦点が定まったり、自分の研究に独創性や新規性があるかどうかを見極めることができます。なるべく早く作業を開始し、一度だけでなく、数回に分けて根気よく続けることが大切です。ある程度まで探索を行ったら、入手可能かどうか調べてみましょう。ようやく見つけた文献や楽譜などの資料が本学附属図書館にない場合には、他大学や海外から取り寄せることになります。その際、手元に届くまでに数週間から数ヶ月かかる場合がありますので、1年次の前期から探索と収集を始めましょう。

研究テーマに深く関わる情報や文献を入手したら、夏休みなどを利用してじっくり腰を据えて読みましょう。ここで得られたさまざまな知識やアイデアが、作曲や演奏における体験とリンクした時に、身体が記憶している感覚や漠然としたイメージが独自の知見（自分の考えや発見、意見、主張）となって焦点をむすび、研究対象や研究方法をしぼり込むのに役立つでしょう。この段階で考えていることを忘れないうちに言語化し、研究概要としてまとめておくことをお勧めします。また、参考文献表も作成しておきましょう。

7. 博士論文作成計画の立て方

表 1. 論文提出までの大まかな流れ

※青字は教務係への提出書類

年次	月	学事暦	学位審査演奏会/作品	音楽活動	論文作成計画例	
1	4	指導教員会議 (1) 研究計画書提出	演奏曲目/作品の構想		論文の仮題目を設定する	
	5	↑ 指導教員会議 (2) ↓	↑ 博士リサイタル または作品発表 ↓		研究準備 資料や情報を探索・収集する 先行研究を精査する 参考文献表を作成する 研究対象をしぼり込む 研究方法を検討する 研究概要を書く	
	6				↓ 研究調査 分析、解説、観察、記録、実験等	
	7					
	8					
	9					
	10					
	11					
	12					
	1			進捗状況報告書提出		
	2					
	3					
2	4	指導教員会議 (1) 研究計画書提出	演奏曲目/作品の決定		章立ての構想を練る	
	5	↑ 指導教員会議 (2) ↓	↑ 博士リサイタル または作品発表 ↓		研究ノートやメモを作成し 研究内容を言語化する	
	6				↓ 論文執筆 研究成果を文章にする	
	7					
	8					
	9					
	10					
	11					
	12					
	1			進捗状況報告書提出		
	2					
	3					
3	4	指導教員会議 学位予備申請提出	学位審査会の準備		論文題目を決める	
	5				↓ 仮完成 文章を推敲する 校正、印刷	
	6					
	7					
	8					
	9					
	10			学位本申請論文等提出		
	11					
	12					
	1	学位審査試験 (口述試問)	学位審査作品提出 学位審査演奏会			
	2					
	3	学位授与			製本、提出 (学位取得後 3ヶ月以内)	

## 2) 研究調査

研究調査の内容や方法は多岐にわたります。各自の研究テーマに応じて、作品分析、史料の解読、フィールドワーク、観察、実験等を行い、記録をとります。このとき、研究ノートや研究カード、ビデオやICレコーダーなどを活用し、調査内容を記録していきます。忘れてはならないのは、**博士リサイタルや作品発表の内容も、重要な研究成果である**ということです。そこで挑戦したことを言語化すれば、立派な研究の一部になります。研究調査と並行して論文の構成（章立て）を考え、目次を作成します。

## 3) 論文執筆

いよいよ研究成果を文章にまとめます。書けるところから本文（序論、本論、結論）を書き始めましょう。演奏活動が忙しい時期は、隙間の時間を利用して、何も考えずにできるような単純作業をすることをお勧めします。たとえば、譜例のスキャン、表の作成など、文章以外の部分を少しずつでも進めておくと、時間を有効に使うことができます。

本文をある程度書き上げたら、パソコンを閉じて論文から離れましょう。自分の考えや言葉を熟成させるためには、冷却期間が必要です。客観的な視点から読み返すためにも、一度机を離れ、論文を寝かせましょう。論文のことを忘れて、好きなことを思う存分楽しみ、気分転換をするとよいでしょう。

十分に休養がとれたら、いよいよラストスパートです。論文全体を読み返し、文章の内容や構成を推敲します。この段階で、できれば誰かに読んでもらい、客観的な意見を伺うとよいでしょう。誤字や脱字、論の矛盾点など、自分ではなかなか気がつかないことを指摘してもらうことができます。

## 4) 論文提出

提出日の1ヶ月前からは、大きな本番や仕事は入れないようにして、論文執筆に専念できる環境を意識して作るようにしましょう。とくに提出の2週間前は、なるべく予定を入れないこと。ただし、演奏をすっかりやめしまうと生活のリズムが狂ってしまうので、普段どおりレッスンに行き、軽めの本番をこなして達成感を味わった方がよいでしょう。また毎日、十分な栄養と睡眠をとり、規則正しい生活をして体調管理に気をつけましょう。運動不足になりがちなので、疲れたら散歩をすると、良い気分転換にもなります。

自分が疲れて来ると、パソコンも疲れます。パソコンの故障に備えて、こまめにデータのバックアップをとりましょう。その際、パソコン本体以外の複数の媒体（USBメモリ、DVD-R、外付けハードディスク、Googleドライブなど）にデータを保存しておくことと安全です。また、プリンタの反応が鈍くなったり、紙詰まりを起こして動かなくなることもあるので、作業が一段落したら作成した文書を印刷する習慣をつけておくことをお勧めします。紙とインクを大量に消費するので、あらかじめ多めに購入しておくことと慌てずに済みます。論文の表紙と綴じ紐は大学生協で販売していますが、売り切れてしまうことがありますので、早めに購入しましょう。論文本体と

## 7. 博士論文作成計画の立て方

その附録は、合計4部提出します。完成した論文の印刷は、提出日の2～3日前から始めましょう。

教務係への提出期限は、毎年10月初旬です。締切時刻の15時を過ぎると受理してもらえません。交通渋滞に巻き込まれたり、電車が遅れることもあるので、時間に余裕を持って家を出しましょう。論文本体以外の提出書類（要旨を保存したCD-R、履歴書等）も忘れずに。

## 4. 上手な計画の立て方

3年次の10月に論文を提出するためには、その1年前から本格的な論文執筆を開始するのが理想的です。つまり、2年次の10月から約50週かけて論文を完成させるのです。博士課程では、履修する授業数は少ないものの、実技レッスンや学内外の行事、仕事や音楽活動でかなり忙しい毎日を送ることになります。約50週のうち、果たしてどれだけの日数を論文執筆に費やすか、自分のスケジュールと突き合わせて考えてみましょう。想像以上に時間がないことに気付きますか？そこで、**意識して論文執筆のための時間を作る必要があります**。今抱えている仕事や本番が終わってから論文に取りかかろうと考えていたら、いつまでたっても論文は書けません。何もしないまま、あっという間に3年間で過ぎてしまいます。論文を完成させるためには、周到な計画を立てる必要があるのです。

ポイントは、**なるべく具体的な執筆計画を立てること**です。まず、やらなければならないことをひとつずつ書き出してみましょう。紙に書いて作業項目を可視化することで、論文執筆に費やす時間に対してどれだけの作業をしなければならないかが明確になります。

次に、いつまでに（期限）、何を（対象）、どこまで（範囲）やるか決めていきましょう。その際、「12月末までに第1章を完成させる」というような大まかな目標を掲げると挫折します。容易に乗り越えられる小さなハードルをたくさん設けるようにすると、三日坊主にならずうまくいきます。たとえば「10月20日までに第1章第1節の初稿を書く」「次の月曜日までに第2章第2節の譜例を作成する」というように小さくて具体的な目標を設定するのです。つまり、**1～2週間単位で達成できるような小さな目標を作ることがコツ**です。実際に行う作業をなるべく細かく具体的に決めていくのです。ただし、計画は予定通りには行かないものです。最初に立てた計画に固執せず、研究の進み具合に応じて柔軟に対応することも大切です。

## 5. なぜ時間がかかるのか

論文を書くという作業は、想像以上に時間がかかります。それには、大きく分けて3つの要因があります。

- ① 技術面：パソコンの入力と編集、譜例や図表の作成
- ② 表現面：文献の精読、アイディアの言語化、文章の推敲
- ③ 心理面：頭の切り替え、気力や思考力の低下

技術面では、パソコン（とくに文章作成ソフトや楽譜制作ソフトの使い方）やスキャナの操作に最も時間がかかります。論文を書きながら使い方を覚えるのでは効率が悪いので、論文を書き始める前にソフトや機材の基本操作に慣れておくと良いでしょう。

表現面では、外国語はもちろんのこと、日本語の文献であっても、それを精読して理解し、批判的に検討を加えるためには、ある一定の時間が必要となります。また、自らの主張やアイデアを言語化するためには、自分の考えを人に話してみたり、紙に書いてみることをお勧めします。そのうえで、学術論文にふさわしい表現で文章にするためには、幾度も推敲を重ねることが大切です。

心理面としては、机に向かい論文を書くという作業は、音楽をする場合とまったく異なる脳や神経を使うので、頭の切り替えがなかなか大変です。慣れるまでは身体が固まり、ストレスが溜まり、気力や思考力が低下して、机に向かう意欲が湧かないこともあります。はじめは一日10分でもよいので机に向かい、何かを読んだり書いたり考えたりすることを日々の日課にするとよいでしょう。千里の道も一歩から。まずは、今すぐできることから始めてみましょう。





# 【付録1】博士リサイタルと学位審査演奏会の 実施方法

## 1. 博士リサイタル

### 1) 演奏・舞踊専攻

演奏・舞踊専攻の博士学生は、博士特別研究の単位として公開の「博士リサイタル」をおこないます。博士リサイタルは、実技に関する中間成果発表の場であると同時に、（研究が実践と関わっているという意味で）学術研究の中間成果発表の場でもあります。

そのため博士リサイタルでは、演奏・舞踊等の実技に加えて、その時点での学術研究の成果やカリキュラム外の研究成果についても、プレゼンテーションやプログラムに記載などによって一般に公開し、評価を仰ぎます。

演奏時期、曲目等については、主任指導教員の指導を受け、実施計画を事前（1 か月前まで）に教務係に申告する必要があります。博士リサイタルには、指導教員会議メンバーとなっている先生に出席をお願いし、終了後に指導教員会議を開催します。

尚、博士リサイタルを開催する際には、教務係で博士ファイルを受け取り、リサイタル終了後の指導教員会議でそれを提出します。終了後は、指導教員会議で指導を受けた内容を記入し、プログラム等の記録も添付した上、博士ファイルを教務係に返却します。

### 2) 作曲専攻

作曲専攻の学生は、上記の演奏・舞踊等専攻の学生と同様に、博士特別研究の単位として博士リサイタルをおこなうか、もしくは、研究テーマに関連した学内外での公開演奏会の記録（プログラム、録音、批評等）を主任指導教員に提出し、指導教員会議を開催します。

## 2. 学位審査演奏会・学位審査作品

### 1) 学位審査演奏会

演奏・舞踊専攻の博士学生は、博士研究の最終成果を、公開の「学位審査演奏会」で発表します。学位審査演奏会には、演奏・舞踊等の実技だけでなく、学術研究やカリキュラム外研究の成果についても、プレゼンテーションやプログラムでの記述などによって一般に公開し、評価を仰ぎます。

作曲を専攻とする学生は、研究作品を指定日時までに提出しなければなりません。また、研究テーマに関連した作品の公開演奏の記録（録音・録画、プログラム、批評等）も、博士ファイルにファイリングし、指導教員会議に提出します。

## 2) 研究成果の公開

博士研究の成果は、文部科学省の学位規則で公開が義務づけられているため、音楽研究科が学位審査演奏会の模様を録画・録音し、一般公開します。そのため、学位審査演奏会では、博士リサイタルとは異なり、多くの手続きが必要になります。

1) 修了年次が決まったら、学位審査委員会の先生と日程調整をおこない、演奏会場の予約をとります。

2) 博士論文提出後すみやかに（遅くとも1ヶ月前までに）、次のことを教務係に届けます。

①学位審査演奏会の内容（日時・場所・演奏曲目・出演者・使用楽器など）とゲネプロの日時（音楽研究科が定める書式 書式1）

3) ゲネプロの1週間前までに、次のものを届けます。

②演奏会当日のタイムテーブル

③演奏曲目の楽譜（コピー可、製本の必要なし）

4) 学位審査演奏会が終了する前に（もしくは終了直後に）、次のものを教務係に提出します。

④学位審査演奏会に出演した全員分の著作権・著作隣接権に関する承諾書（音楽研究科が定める書式 書式2）

⑤演奏会記録複製申込書（音楽研究科が定める書式 書式3）

なお、作曲専攻の場合は、学位審査作品（必要に応じて、研究テーマに関連した作品も含む）を研究成果として公開します。作品演奏の録音・録画がある場合は、音楽研究科が定める著作権・著作隣接権に関する承諾書とともに、音声・映像メディアを教務係へ提出します。

【参考】東京芸術大学音楽学部における演奏活動に関わる著作隣接権等の取扱要項（東京芸術大学規則集第11編第2章）

[http://www.geidai.ac.jp/kisoku\\_koukai/pdf/p20120330\\_424.pdf](http://www.geidai.ac.jp/kisoku_koukai/pdf/p20120330_424.pdf)

書式1（書式は年度によって変更される可能性があります）

<b>学位審査演奏会 録音・録画申込書</b>		
申請者氏名：	専攻：	学籍番号：
申請者電話番号：		
申請者メールアドレス：		
◎学位審査演奏会		
開催日時：	年 月 ( ) 時 分 ~ 時 分	
演奏会場：		
演奏曲目：		
出演者（使用楽器等）：		
◎ゲネプロ		
開催日時：	年 月 ( ) 時 分 ~ 時 分	
演奏会場：		
<hr/>		
<b>注記</b>		
下記の書類も指定の期日までに提出すること。		
(2) 演奏会当日のタイムテーブル（任意の別紙を添付）【ゲネプロ一週間前までに】		
(3) 演奏曲目の楽譜（コピー可、製本の必要なし）【ゲネプロ一週間前までに】		
(4) 著作権・著作隣接権承諾書（出演者全員分）【別書式：演奏会終了直後までに】		
(5) 演奏会記録複製申込書【別書式：演奏会終了直後までに】		

書式2（書式は年度によって変更される可能性があります）

学外公開（著作権・著作隣接権）

東京藝術大学 音楽学部

博士学位審査演奏会 関係者の皆様

東京藝術大学では、本学に関係する演奏会の記録を後世に残し、また広く社会への発信を進めるべく、デジタル形式でのアーカイブ構築を行っております。

このため本演奏会の録音・録画・写真撮影を行います。これらの媒体素材は、本学における研究・教育活動成果の発信と、音楽文化のさらなる普及を目的として、以下のように用いられることが予定されています。

- ・ インターネットおよび放送を通じた音声・動画の配信
- ・ CD・DVD等デジタルメディア媒体での複製と配布
- ・ 印刷媒体や本学ホームページを通じた広報利用
- ・ その他、研究・教育・芸術活動に関連し、本学が特に必要と認める利用

つきましては、これらの点をご理解いただき、下記の演奏会における、演奏にかかる著作権及び著作隣接権等のご承諾をいただけますようお願い申し上げます。

記

- 1) 名 称：博士学位審査演奏会
- 2) 公演日：20 年 月 日（ ）
- 3) 場 所：

以上

東京藝術大学 音楽学部長 植田克己

承 諾 書

私は、本演奏会の録音・録画・写真等の資料が、上記の目的で使用されることを無償で承諾します。

年 月 日

郵便番号：

住 所：

電話番号：

楽器・声種名：

署 名：

印

（演奏家名：

）



## 【付録2】博士学位授与プロセスのガイドライン

東京藝術大学芸術実践領域（実技系）博士プログラムより

「III. 博士学位授与プロセスのガイドライン／2. 音楽研究科」部分を抜粋

### 1. 研究の定義

音楽文化学専攻以外の博士課程において、「研究」とは、相互に密接に結びついた3つの構成要素、すなわち「実践研究」、「学術研究」、「カリキュラム外活動研究」から成る。「実践研究」とは、作曲や演奏等の技能や表現力の向上を目的とする実践的な研究（レッスンやコンサートとそれに向けての練習）であり、「学術研究」とは、芸術実践に基づく、あるいはそれを高めるための学術的な研究を指す。また、「カリキュラム外活動研究」とは、留学やコンサート活動など、学内外におけるカリキュラム外の音楽活動を指す。とくに「学術研究」のテーマに関連した音楽活動、及び海外での公的なコンサートへの参加やコンクールでの入賞など外部評価を受けたものについては、博士課程における研究の一部として申請することができる。

### 2. 博士研究記録ファイル

博士研究の進捗状況は、博士研究記録ファイル（以下「博士ファイル」と略）によって管理する。博士ファイルは、従来の研究計画書と進捗状況報告書を一体化させ、博士研究のプロセスが一覧できるようにしたものである。博士リサイタルのプログラムや指導教員会議で話し合われた内容の記録など、博士研究に関連する記録はすべて、この博士ファイルで一元的に管理する。

当面は、書式一式（Word形式）を学内ウェブ上に公開し、それを適宜ダウンロードして記入・ファイリングする。ファイルの管理は教務係がおこなう。閲覧は、原則として本人と担当指導教員（指導教員会議のメンバー）とする。将来的には、ウェブ上でのファイル管理を目指す。

### 3. 指導教員会議

指導教員会議は、主任指導教員と副指導教員（2名）から構成される。副指導教員は、学生の研究テーマや意向にもとづき主任指導教員が任命する。必要に応じて、副指導教員（学外の専門家を含む）を増員することも可能である。指導教員会議には、当該学生の専攻以外の教員（他の実技専攻の教員や学科系教員）が含まれるのが望ましい。指導教員会議の構成員は、各年度の初めに博士ファイルに記載され、教務係に報告される。

指導教員会議は、年に二回開催しなくてはならない。ただし、初年度と修了年度以外は、年度

初めにおこなわれる会議を、当該学生と主任指導教員のみで（必要に応じて任意の副指導教員も交えて）おこなうこともできる（この形態を以下「縮小指導教員会議」と呼ぶ）。

主任指導教員は、学生が入学後すみやかに指導教員会議を組織し、当該年度の履修登録終了までに第1回会議を招集する。この会議では、博士課程在籍中の長期研究計画を主な議題とする。当該学生は、指導教員会議の一週間前までに、博士ファイルを教務係で受け取り、研究計画の下案を書いた別紙を添えて、指導教員全員に事前に提出しなければならない。2年次以降についても、当該年度の履修登録終了までに指導教員会議（もしくは縮小指導教員会議）を開き、その年次の研究計画について話し合う。博士ファイルの扱いは初年度に準じる。

各年次2回目の指導教員会議は、博士リサイタル終了後年度末までに（作曲専攻は年度末に）開かなくてはならない。博士リサイタルで示された演奏等の成果（作曲専攻は提出作品や公開演奏に示された作品の成果）、芸術実践に基づく（あるいは実践を高める）研究の中間成果、カリキュラム外での活動研究成果、及び当該年次の研究計画を主な審議事項とする。

学生は、各指導教員会議後すぐに会議の内容を記録し、博士ファイルを教務係へ提出する。

## 4. 博士リサイタル

演奏・舞踊等専攻の学生は、博士特別研究の単位として博士リサイタルをおこなうものとする。博士リサイタルは公開とし、演奏・舞踊等に加えて、当該時点での学術研究の進捗状況やカリキュラム外での研究活動についても、プログラムでの記述やプレゼンテーションなどによって周知をはかり、評価をあおぐ。博士リサイタルには、当該学生の指導教員会議メンバーとなっている教員も出席し、終了後、指導教員会議を開催する。演奏時期、曲目等については、主任指導教員の指導を受け、その実施計画を事前に教務係に申告しなければならない。

作曲専攻の学生は、上記の演奏・舞踊等専攻の学生と同様に、博士特別研究の単位として博士リサイタルをおこなうか、もしくは、研究テーマに関連した学内外での公開演奏会の記録（プログラム、録音、批評等）を主任指導教員に提出し、指導教員会議を開催する。

## 5. 年次手続き

### 5.1. 1年次

博士後期課程の学生は、入学後すみやかに教務係で博士ファイルを受け取り、主任指導教員と相談の上、3年間の研究計画及び1年次の研究計画を立案。履修登録終了までに指導教員会議を開催する。指導教員会議は、主任指導教員が招集する。指導教員会議後すぐに会議の内容を受けて修正した研究計画書を博士ファイルに綴じ、教務係へ提出する。

博士リサイタルを開催する際には、教務係で博士ファイルを受け取り、リサイタル終了後の指導教員会議へ提出する。終了後、指導教員会議の内容を記入し、博士リサイタルのプログラム等の記録も添付して博士ファイルを教務係に再提出する。

## 【付録2】博士学位授与プロセスのガイドライン

作曲専攻で博士リサイタルを開催しない場合は、指導教員会議を開く前に、研究テーマに関連した学内外での公開演奏会等の記録（プログラム、録音・録画、批評等）を主任指導教員に提出し、指導教員会議の開催を要請する。指導教員会議は主任指導教員が招集する。指導教員会議終了後、指導教員会議の内容を記入し、公開演奏会等の記録も添付して博士ファイルを教務係に再提出する。

1月には、教務係で博士ファイルを受け取り、研究進捗状況報告書に必要事項を記入。指導教員は指導内容を記入し、1月末までに博士ファイルを教務係へ提出する。これをもって博士特別研究の単位認定手続きに入ることとする。

### 5.2. 2年次（～修了前年次）

2年次以上の学生は、年度が始まったらすみやかに教務係から博士ファイルを受け取る。前年度の進捗状況報告書を参考にしながら、主任指導教員の指導のもと、当該年度の研究企画を立案し、すみやかに縮小指導教員会議の開催を要請する。縮小指導教員会議後すぐに会議の内容を受けて研究計画書を修正し、博士ファイルを教務係に再提出する。

博士リサイタルを開催する際には、教務係で博士ファイルを受け取り、リサイタル終了後の指導教員会議へ提出する。終了後、指導教員会議の内容を記入し、博士リサイタルのプログラム等の記録も添付して博士ファイルを教務係に再提出する。

作曲専攻で博士リサイタルを開催しない場合は、指導教員会議を開く前に、研究テーマに関連した学内外での公開演奏会等の記録（プログラム、録音・録画、批評等）を主任指導教員に提出し、指導教員会議の開催を要請する。指導教員会議は主任指導教員が招集する。指導教員会議終了後、指導教員会議の内容を記入し、公開演奏会等の記録も添付して博士ファイルを教務係に再提出する。

1月には、教務係で博士ファイルを受け取り、研究進捗状況報告書に必要事項を記入。指導教員は指導内容を記入し、1月末までに博士ファイルを教務係へ提出する。これをもって博士特別研究の単位認定手続きに入ることとする。次年度に学位審査を受ける場合は、研究進捗状況報告書にその旨を記載するとともに、すみやかに予備申請の準備を開始する。

### 5.3. 3年次（もしくは修了予定年次）

学位審査を受けようとする者は、年度が始まったらすみやかに教務係から博士ファイルを受け取る。論文の概要（タイトル、2000字程度の要旨、目次）と進捗状況表（当該時点での進捗状況と提出までの進捗計画）を準備し、「指導教員会議」の開催を要請する。指導教員会議は主任指導教員が招集する。指導教員会議で予備申請が承認された場合は、4月末日までに予備申請に必要な書類を教務係（を通して学位委員会）へ提出しなければならない。

予備申請に必要な書類は、①学位審査事前承認願書、②論文の概要（タイトル、2000字程度の要旨、目次）、③進捗状況表（当該時点での進捗状況と提出までの進捗計画）、④博士ファイル（当該年度までの記載のある研究計画書、進捗状況報告書、博士リサイタル等の関連資料、指導



教員会議の記録)である。学位委員会は、予備申請書類を審査し、その結果を学生に通知する。

なお、予備申請後に学位審査を辞退する場合には、辞退願を学位委員会に提出すること。

## 6. 最終審査

### 6.1. 学位審査委員会

学位請求論文が提出され、本申請が行われた後に、主任指導教員は、学位審査規則に従い、審査委員会を組織する。

### 6.2. 審査の対象

「博士(音楽)」の学位審査では、実践研究(学位審査演奏会、もしくは学位審査作品)、学研究(学位論文)、カリキュラム外での研究活動(記録資料)を総合的に評価する。

### 6.3. 学位論文

実践研究の成果は、学位論文にまとめ、10月の指定日時までに教務係に提出する。〆切日時を過ぎたものは、提出を認めることはできない。

### 6.4. 学位審査演奏会・学位審査作品

演奏・舞踊等を専攻では、実践研究の最終成果を、公開の学位審査演奏会で発表する。学位審査演奏会には、学研究やカリキュラム外研究の成果についても、プログラムでの記述やプレゼンテーションなどによって公表し、評価をあおがなければならない。

作曲を専攻とする学生は、研究作品を指定日時までに提出しなければならない。また、研究テーマに関連した作品の公開演奏の記録(録音・録画、プログラム、批評等)も博士ファイルにファイリングし、指導教員会議に提出する。

学位審査演奏会の模様は、音楽研究科が録画・録音をおこない、データベース化する。そのため、学生は学位審査演奏会の予定が決まり次第、すみやかに本番の日時、リハーサルの日時、プログラム、出演者、本番当日のタイムスケジュール等を教務係に届け出る。また、学位審査演奏会出演者(学生本人を含む)は、博士研究公開のため、音楽研究科が定める著作権・著作隣接権に関する書類に承諾の旨を記し、学位審査演奏会後すみやかに教務係へ提出する。

作曲専攻の研究テーマに関連した作品、学位審査作品については、著作権・著作隣接権に関する承諾が得られたものについて、音楽研究科が定める承諾書とともに教務係へ提出する。

### 6.5. 最終試験(口述試問)

学位論文提出、学位審査演奏会(もしくは学位審査作品提出)終了後に、学位委員会のメンバーによる最終試験となる口述試問をおこなう。事前に教務係で博士ファイルを受け取り、指導教員会議に提出する。

## 7. 研究成果の公開

博士課程における研究成果は、公開しなければならない。学位審査演奏会等実践研究の成果、及びカリキュラム外活動研究の成果は東京藝術大学データベースに登録し公開する。学位論文については、学位取得後3ヶ月以内に誤字脱字等の修正の必要があれば訂正し（内容に関する加筆や修正は認められない）、3部を製本の上、教務係に提出する。これをもって学位取得要件をすべて満たすものとする。製本については、「製本仕様」を参照のこと。

※学位審査演奏会の記録公開については本冊子の「付録1」を参照してください。

作成：

東京藝術大学大学院音楽研究科リサーチセンター  
(平成 20～24 年度)

編集：

中村美亜

執筆：

遠藤衣穂  
中田朱美  
中村美亜  
平井真希子  
向井大策  
森田都紀  
吉川文

## 芸術実践領域（実技系）学位論文作成マニュアル

発行者：東京藝術大学大学院音楽研究科

発行日：2013 年 3 月 31 日

©2013 東京藝術大学

※ 無断転載・複写・引用を禁じます。  
使用の際には、必ず許可をとってください。  
問い合わせ：東京藝術大学音楽学部教務係  
〒110-8714 東京都台東区上野公園 12-8